



善光寺道名所図会

五

ル 4
4500
5



門 4
 號 4500
 卷 5



善光寺道名所圖會卷之五

目錄

桂の木 鐘樓	善光寺道 制札	熊野宮	御茶屋	大宮	加賀川	田中	花川の沢 本堂 二王門
御供所 不動堂	石垣供養塔 秩父三十四番觀音	安樂寺	横吹瀧	七久里温泉	石鳥居 末社	摺白の宮 根津甚平城趾	
地主神の社 男石明神	八角四重塔	男神嶽	久我湯 大師湯	鳥居 末社	相撲場	小諸	廂山塔 西行石像
藥師堂 温泉明神	びん樹 惟茂塚	常樂寺	出浦古記 名所旧跡	古戰場 同近隣の圖	海野平	海野小太郎城趾	獅子岩 塊岩 牛頭天王 諸村 親迎堂 仙人座
昆沙門 子安觀音	鏡池 幕宮池	水澤	上田	白鳥宮	海野小太郎城趾	布引山	二天岩 太子塔
					地梨手 石和氏家系	釋尊寺	不動堂 あこの祠
					富士見坂 南殿櫻		

早稲田大學圖書館
 第 33.11.13 號
 藏書



州彦

ゆらけとに

うんま

あま目を

おのゝとて

旅ゆ

みらゆ

さやち

ゆ

新河

くさう坂 阿弥陀堂
 楷子阪 薬師堂
 庫裏 鐘樓
 客殿 氷村
 小ごう池 三ツ屋
 御料境 浅間山
 追分 浅間大焼畧説
 碓氷嶺権現

附録

関東大川の水源 信濃園内謡曲目録
 蓼科山 蓼科神社 雷鳥 雷歎
 物真太郎塚 同物語 金峯山北山男
 信州名物 蕎麥切の説
 山姥の杵

岩穴 太鼓堂 焙麿
 白山宮
 六地藏
 蓮池
 血の池
 濁川
 鶴ヶ巣籠

頃日夕立の空さぞ免方に後夜日救あまこにまき来くをきくと又れく急
かきく過来一りくを顧ま山路雲間没といふ如く夏山の慣ひとて所々
に雲霧之昇り風は任意籠籠てや遠山の眺ふぬふるす何上田乃新町
とて右へくれ千曲川乃橋を流る中の中加畠小鳩干梅舞田八木澤の村
里と越一こ小縣郡出浦郷別所七久里温泉小浴と

後拾遺
はまをさるる心をつのまかたや七くれつゆぬん 相摸
城川四三

家集

世れ人乃意のやほひの業とや七くまの湯のつぎくろむ 肥後

ま當所七久里温泉れ由来と尋るに 人皇十二代景行天皇の御宇日本
武尊東夷征伐一り一物此地を通行し給ひるに南方れ山下に煙氣
あふくと立昇りまきいりぬるなるんと勢く足り一所小一人の老翁忽
然と出来り尊に生々曰此地小七久里温泉なり其性異り是は浴せん者
七種乃病苦を離れ壽命延長なり君是を聞さぬ一吾ハ大己

貴るり勢く疑く居くはとて失る尊奇異の思ひをな一山の麓を尋
ね七久里温泉と求て浴後率も浴さしめ試み給へ疾苦かまは
者代速平翁一り名を惣名を七苦離乃温泉と号む大己貴命とい温
泉明神と崇奉り給へ猶今我聞瀾此温泉之くい里に繁榮するべと
誓ひ給ひ七久里温泉と書遺一む一とあり又此地小二れ高山有る
伊弉諾伊弉册の二尊影向一むひ男女れ乃て教へ登り給ひ一頂るると
を尊関一るを男神嶽女神嶽と号け社を顛小立あけ二山り各
御手洗あり其流の落合川を相深川と呼ぶ西嶽れ神祠峯を隔れば
是を合せ祀りて結神と名号する一人皇四十六代天武天皇白鳳年間
當國東間の沓湯小行幸らるせ給んとく荒田尾の連磨等行宮依
造りたる所是より東れ山陰小七久里温泉なるを同はる初と奏
一々れが帝此地小行幸ありて七久里の中にも傍まする二ヶ所の湯は浴一
むひ一り玉野快然とて歡感の餘り永壽湯長命湯と名を賜ひ山上

あし
大己貴
の美
出現
温泉
の
夏と
泥
の
図



日本武尊
東征の刺
此所と徑



春江補畫

宮居を遙拜まじりて所製れ和歌を遺さるる由

位法方於古記文居のま婦山並代つきみまじりて也

此所製より位法之ゆも七之里のみゆもいりて 帝行文小あり

あよそ守りんとて加茂下上乃兩神影向一終へ此地小神祠を營りて

或夜月の隈方く隆升り曠くも多廣野青海原のおまぐく尺へりて是や

浦邊に出るるよりや勅有より出浦の郷と辨く

人皇四十五代即武天皇れ御寓行基菩薩此地に降り終ひ瑠璃殿を造

立一薬師如来と安置一及長樂安樂常樂之樂寺と建連綿ゆひ

が後年天変ゆく燧失一各目的之言ひ傳へりて

人皇五十三代淳和天皇の御宇天長二乙巳年此地東面の山下より毎夜

光明天小昇り遂に大坑ありて火煙を吹出り砂石を飛りて里民怖

惑ひ四方小散乱し時の守護事れ子細と奏問ありけるに天文の博士小致

くさせり所靈仏現り終りん奇瑞ありんと奏も因茲中納言安世に

勅令らりて當時徳行の園之る圓仁明福の兩所とけし彼地小下向り利世

安民の祈誓ありて之依之兩師安せりて来着りて火坑小むり

頭密の修法ありて身等七日十月廿五日にありて火煙消滅一坑中より某

師如来觀音薩埵の天像紫雲小来り出現しるに南方に飛遷り止りて

尊像出現乃折り坑中より黒水激沸り一鉢六面の鏡石ありて六道四

生の相を示せり安世都小帰り安世火坑変成池の悲願空りかざる奇瑞

逐一天聽小達りて 帝獻さる麗しく園守に勅して良木工匠をさる

重りて大師小勅して此地に仏園と營りてありて干時火坑出現の觀音薩

埵圓仁大師小夢の所告あり我を北面に安させよ我北小向りん事小斗の子載

小等しくん事を守りんとたり大師爰覺り奇の思ひをかり即大悲

閣を水面に建立り明福大師と瑠璃殿を造りて某師如来を安置りて

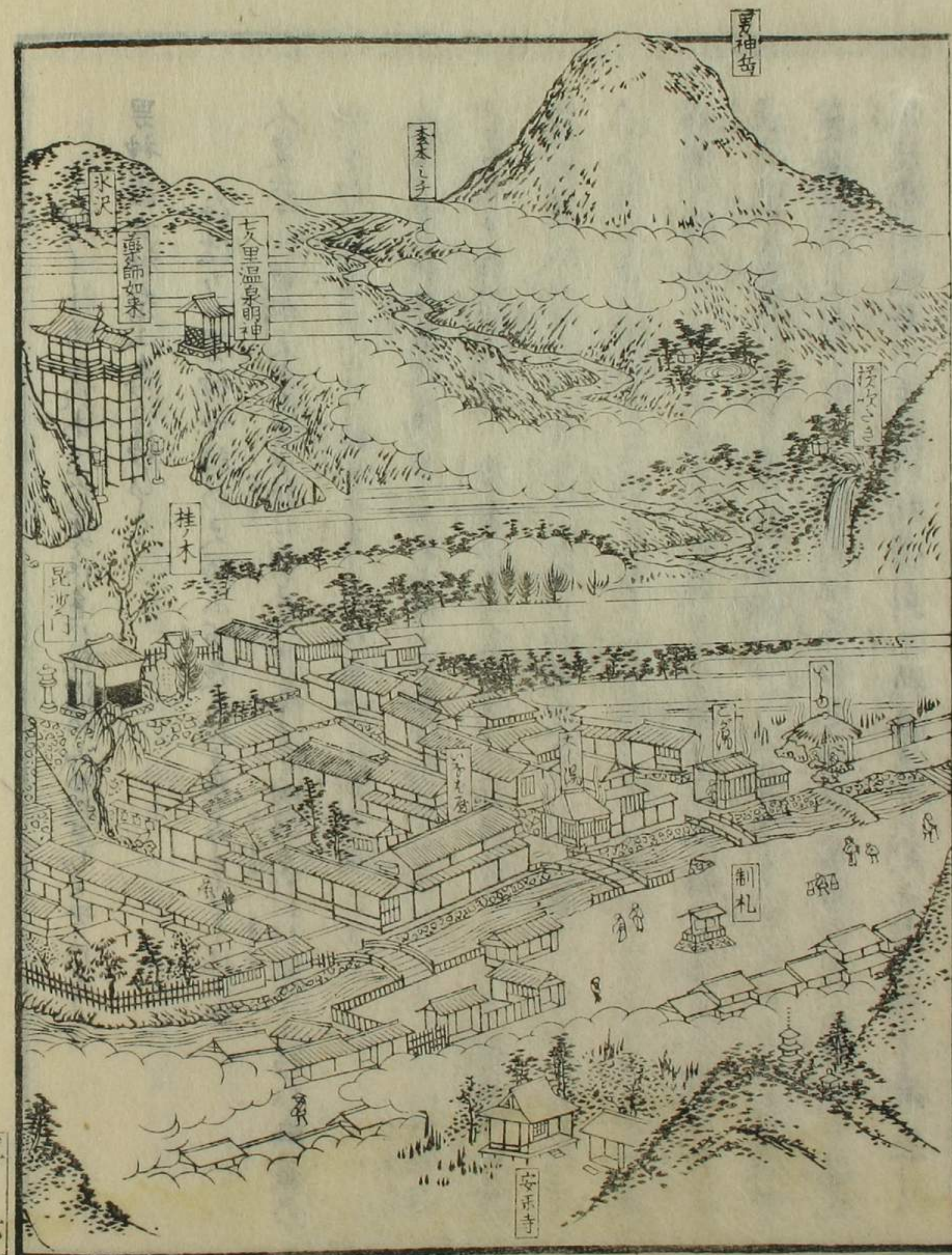
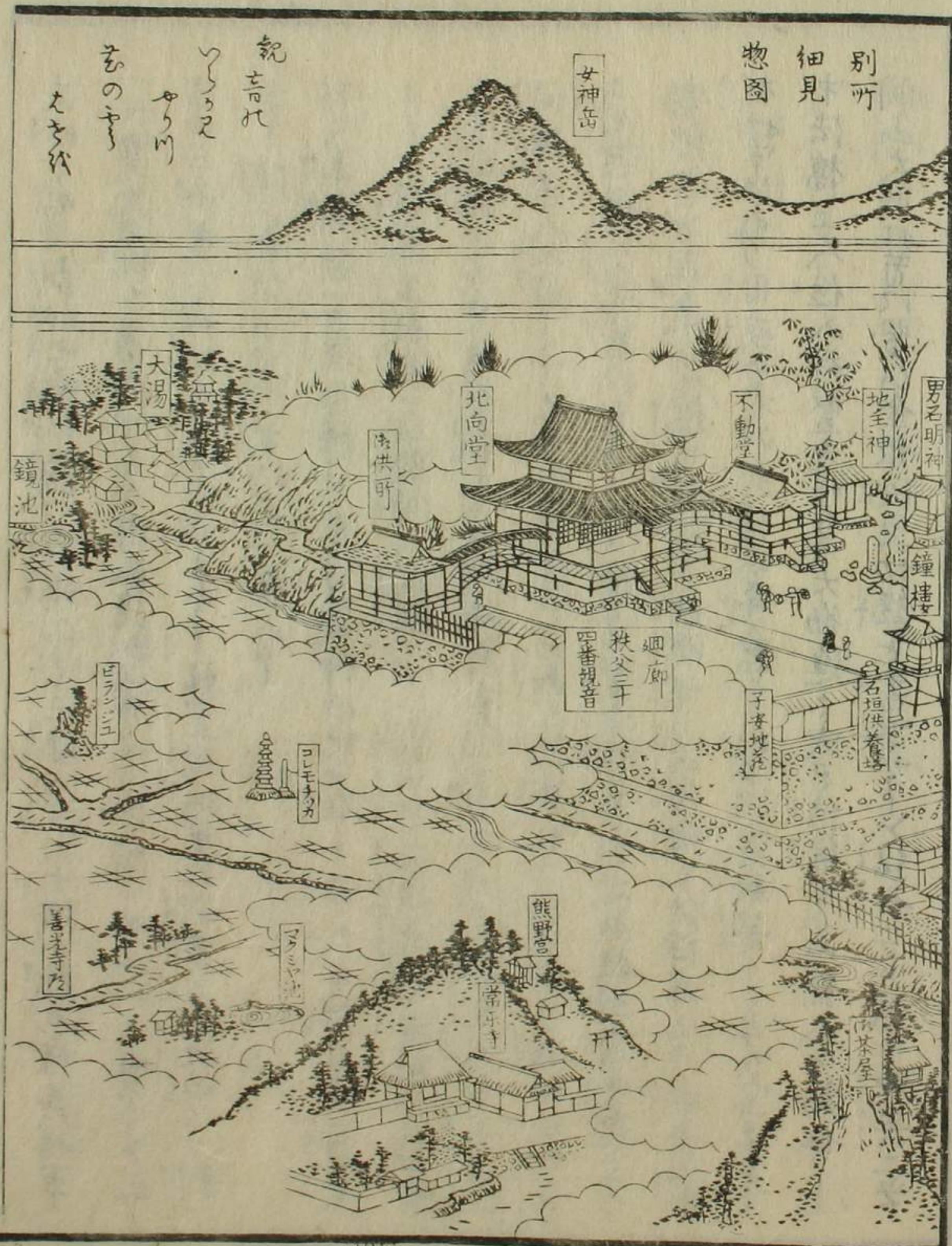
天長三丙午十月廿五日入仏供養なり相次で長樂常樂安樂之寺再

建りて台密禪之宗に表り且而嶽尊神れ本地堂を男神岳小造り

一 弥陀如来十一面观音と安置して嶽の浄堂と稱して又正観音馬
頭觀音此堂を建立して岩谷堂と号し次小二尊出現の火坑のうへに
寶塔と造営し諸師来集し金銀泥の一切経を書寫し宝塔に納りて
山内の鎮守に江別坂春日吉山王の内八王子権現と勅請し終り七之里
温泉も茶師親吉示現ふりて再興し温泉明神結の神乃社等と再
建し勅使をくく免兩師温泉浴しひより又温泉れ名世に高く同
えりつゝある夜異人來り系仁大師に示りて曰此地温泉の功他小異なりといふ共
猶大慈の悲願深きとめりて北斗九の業法と授なりといふ失とあり
人皇五十六代清和天皇御不例の折柄靈夢を感しあひ北向山所歸依
深く諸堂社を再建せし先新小觀土院蓮華院明聖院西尊院を造りて
ひ三樂寺に別院とれし九重五重八角四重の塔を徑營し壹千貫文の地を
寄附し萬の料小増かし終り同帝れ皇孫滋野親王當國海野に坐し
たれば此地温泉浴しとあり和歌を詠し終り

むくより下にある火の巻は信濃のみおれさむるまはな
男神嶽女神嶽小系り終り

信濃なる男神女神の夫婦山百夜もろくをみたりしれ
人皇六十代醍醐天皇のまご敦仁親王と申奉り時温泉に行路し終り西嶽乃
神を招し結府の二字と額面を書しあひ里宮小掛さゆたあり
人皇六十三代冷泉院の御宇安和二年當國戸隱山小活鬼紅葉といふ妖賊住
ぶ人民を殘害し此由 皇聽し入りて是の意を退治とて平維茂に勅命
あり維茂は北向觀音日吉八王子権現に祈願を籠戸隱へ發向し賊主を打取
るに活鬼紅葉の魂魄大天狗小天狗と飛をありて八丈坊九丈坊と名乗日吉
権現の眷属とあり北向山を守護せんと誓ひたり維茂報く賊徒を亡し
民乃患と除きしるに帝感感斜なり維茂を將軍に任し信濃甲
斐越後乃大守となしあひぬ因茲惟茂將軍當國松尾小居城を築
大悲殿瑠璃殿日吉此神祠其外不殘再建し別小六十坊を建立し



支坊と稱しむし七堂伽藍の靈場ゆく三樂四院六十坊と稱し惟茂將軍
一千貫文の地を寄附しむし淳和清和兩帝より寄附しむし二千貫とむし
塩田二千貫文の地を當山領となり終り猶此里に別業を造営し別
所と呼ぶとむしより里れ名とすれり

扱も年曆數百歳を経く本曾義仲は地小在し平氏を討んとて放火
しんを梵閣金殿兵火の餘殃小成燼とたりと大悲殿并安樂寺は八角四重
の寶塔殘り其後右大將頼朝卿海野氏に台命ありし諸堂社を再建
法橋上人入禪して大悲殿を守りし新小祇園社を結の神乃攝社小加え
らる其後北条家にをひく常樂寺堅者性算を大悲殿別當中興と
安樂寺と再建して樵谷禪師を臨濟禪門の兩祖と稱し禪師の淨影堂最
林に中にあり同族の者此影像小平念をりし靈驗著し其る宝治年
中法橋上人位入禪堅者性算大勸進と成り結縁のとめ法人を勸發し
開山大師は昔に習ひ金銀泥の一切經を書寫せしと弘長二壬戌年中興二學

阿闍梨頼真社昔二尊出現し終ひし火坑小納め石の宝塔と再建を
足利將軍義滿公治世海野氏台命と蒙り諸堂社を再建し又神託
よ依て西嶽の里宮結の神社を今地小遷し熊野三社權現と改め祭る其
後天文永祿の頃甲越數度鬪戦小及び諸堂社兵火の爲に荒廢を依之諸
人志と寄再建しりし漸く四海泰平の化小趣き元禄年中又真田彦諸堂社
を再建し終ひりし以上別所七文里温泉由来記を抄出きて

附録曰七文里温泉開闢の七名大已貴命神号七名小配以

- | | | | | | | | |
|----------------------------------|-------------------|----------------------|-------|------|-----|-----|-----|
| 大已貴命 | むら湯 | 大國主命 | くも湯 | 大物主命 | ゆげ湯 | 顯國命 | くも湯 |
| 八十夜命 | やち湯 | 芦原醜男 | あし原湯 | 大國魂命 | くも湯 | | |
| 又中興の七名と | 藥師如來の七名小原 | | | | | | |
| 善名稱吉祥王如來 | ぜんちやう湯 | 宝川知嚴音自在王如來 | ちんげん湯 | | | | |
| 金色宝光妙行成就王如來 | こんしきほうきょうじょうじゆ王如來 | 無憂最勝吉祥王如來 | むしやう湯 | | | | |
| 法界雷音如來 | ほうがいらいん湯 | 法界勝惠遊戯神通如來 | ゆげ湯 | | | | |
| 藥師瓔珞光如來 | りやく湯 | | | | | | |
| 後世通俗の七名所謂 | 大師湯 | 天武帝俗座のひし時永壽湯と号しむし | | | | | |
| 北条義政小孫郡を領し此地通俗室と稱し成湯にのり入浴ありしとすれり | 大湯 | 後慈覺大師の像を安置せしとす大所湯と号し | | | | | |
| 後世通俗の七名所謂 | 大師湯 | 天武帝俗座のひし時永壽湯と号しむし | | | | | |
| 北条義政小孫郡を領し此地通俗室と稱し成湯にのり入浴ありしとすれり | 大湯 | 後慈覺大師の像を安置せしとす大所湯と号し | | | | | |

玄濟湯

雉子湯

籠り湯

石湯

久我湯

出浦御別所名所舊蹟 中世海部郷と云

大谷諏訪明神

例祭三月十日

杉木伊豆權現

下宮箱根權現

横吹瀨

箱根權現の神子洗の流あり

瀧入大山祇社

例祭十月十日

堂平

西岳寺の本地堂の跡あり

岩谷堂

正觀音馬頭觀音 淨日二月十七日

鹽水

塩の水湧るはこに耕るの田に流る用ひせとて田といふ

大峯鹿嶋明神

以下に板尾根といふあり

媒岩

以上女神通ひはあり

蓮華山

觀土山

親土院

浴室御茶屋旧跡

大陣湯の西の方あり

温泉藥師瑠璃殿

北西小温泉あり

温泉明神社

祭神大己貴命 少彦名命合殿

北向山大悲殿厄除千手觀世音

護土堂 秩父堂 黒沙門堂 男辨明神

再命延長の事あり神あり

綠日正月十七日 二月十七日 三月十七日 七月九日 十月二十五日

每歲二季彼岸 中日開扉 日向大縁年 乙巳年 小縁年 子巳年

七久里權現

より神あり

男神嶽

伊弉諾を名は

九頭龍權現

當山け守權現

例祭六月十五日 往古より

當日未明小神主

郷中登山三太余の長懺

郷中家殺小降ひ立並へ神酒と

倍へ清領主清武運長久御中安全五穀豊饒を祈り神酒を酌とて

下山一女神嶽の麓より大湯の地より並へ女神嶽乃尊神へ供へ又神酒を

角くを式とて

むす女神岳へ頂上まで供へたる大樹成り懺立を

例祭懺

孤多く敵ざる由來と尋らば

往古累年此旱魃より山川の流絶え井水乾乾

里民渴して死ふ及んと依り男神女神の両岳へ祈草一太石遠ふ下し

民の患ひを救ひ玉り里民あへん限り敵んとて長き布と張り龍神の

形を表し星を立並へ祈り多し男神岳の上より當り九頭龍の形を

は雲現下女神長れく

ふ霞を齋しく大雨車軸を流る如く降

下は是よりて千載れ今ふり懺を敷るより每歲急る事あり

九

頭竜權現を男神岳の守權神と

きまると是より

是より

例祭六月十五日

女神嶽

伊弉册尊を秘傳

本地土面觀世音

大天狗小天狗

當山の守權神

より神あり

例祭六月十五日

女神嶽

本地土面觀世音

大天狗小天狗

當山の守權神

より神あり

例祭六月十五日

女神嶽

本地土面觀世音

大天狗小天狗

當山の守權神

より神あり

例祭六月十五日

女神嶽

本地土面觀世音

大天狗小天狗

當山の守權神

より神あり

例祭六月十五日

女神嶽

本地土面觀世音

大天狗小天狗

當山の守權神

より神あり

例祭六月十五日

女神嶽

本地土面觀世音

大天狗小天狗

當山の守權神

より神あり

例祭六月十五日

女神嶽

本地土面觀世音

大天狗小天狗

當山の守權神

より神あり

氷澤三嶋明神 両岳乃 三交 暖氣少く雪水より夏土用氷 例祭十月二十七日

幸神橋 二様の神氣向ひ男女の道 相澤川 西岳の寺に院川藤合ふより

北向山觀音院長樂廢寺 大悲觀より乾の方に 廢地あり三樂は昔之 鏡が池 ひやう大坑より石橋向ふ人子

美欄樹 押流此所より後年枯て今大樹の末より 西行房橋 冬に冬夏枯と

崇福山護國院安樂寺 本尊觀如來未 今ハ曹洞宗 祖師堂 八角四重塔 惟茂將軍の再建

九重石塔 平惟茂公の墳墓 東の沢あり 北谷祇園社 祇園寺六月朔日 より同十四日と 熊野宮 井 十六社 齋藤

金剛山照明院常樂寺 大慈殿別當天台宗 本尊阿彌陀如來 多寶塔 北向觀音火坑 出現の旧跡 三重石塔 温泉茶 師火坑

正二位熊野三社大權現 例祭三月三日 同十月廿六日 幕宮正八幡宮 池あり

黄金山龍田明神 いづれ黄金の山にて朝日映し各 大塚 惟茂將軍其大家也

此外末社の二十二社 并六十坊の旧跡有りと云ふを以て畧す

所ノ道法 上方より江戸往來の節別所北向山へ去んよ中山道洗馬宿分松本へ 出保福寺峠と越ノ別所下り十里余別所長瀬通海野宿出て退分宿まで九里

一 東國より善光寺系宿小別所向之去んよ海野宿より長瀬通別所へ三里餘

諏訪刑荒神へ去んよ大屋の下茂沢の船と渡り小牧通海野分荒神へ壹里餘

荒神分別所と貳里余別所分半邊の船を渡り嵐へ出善光寺と十里余室賀峠

と越ノ別所へ去んよ善光寺と十里とて十三里余本街道善光寺と十二里あり

一 飯坊分善光寺系宿の節別所へ四んよ和田嶺と越長久保宿分腰越へお砂を

越別所へ去んよ十里越て廿二里あり本街道飯坊分和田長久保上田通同く二十二里あり

去程小代代長久治り北向山の繁昌日増し草木をなびく若代で同

出浦記上段

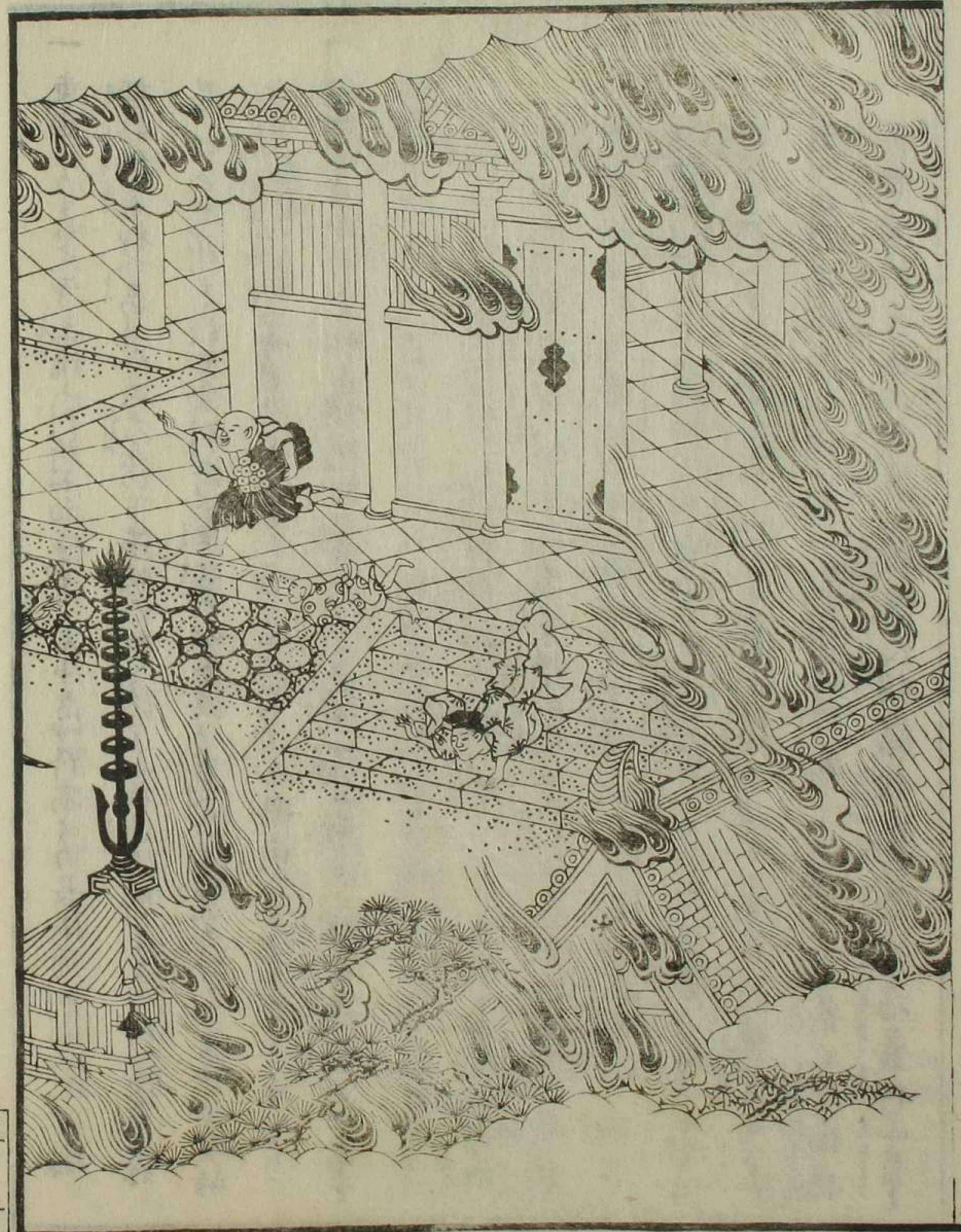
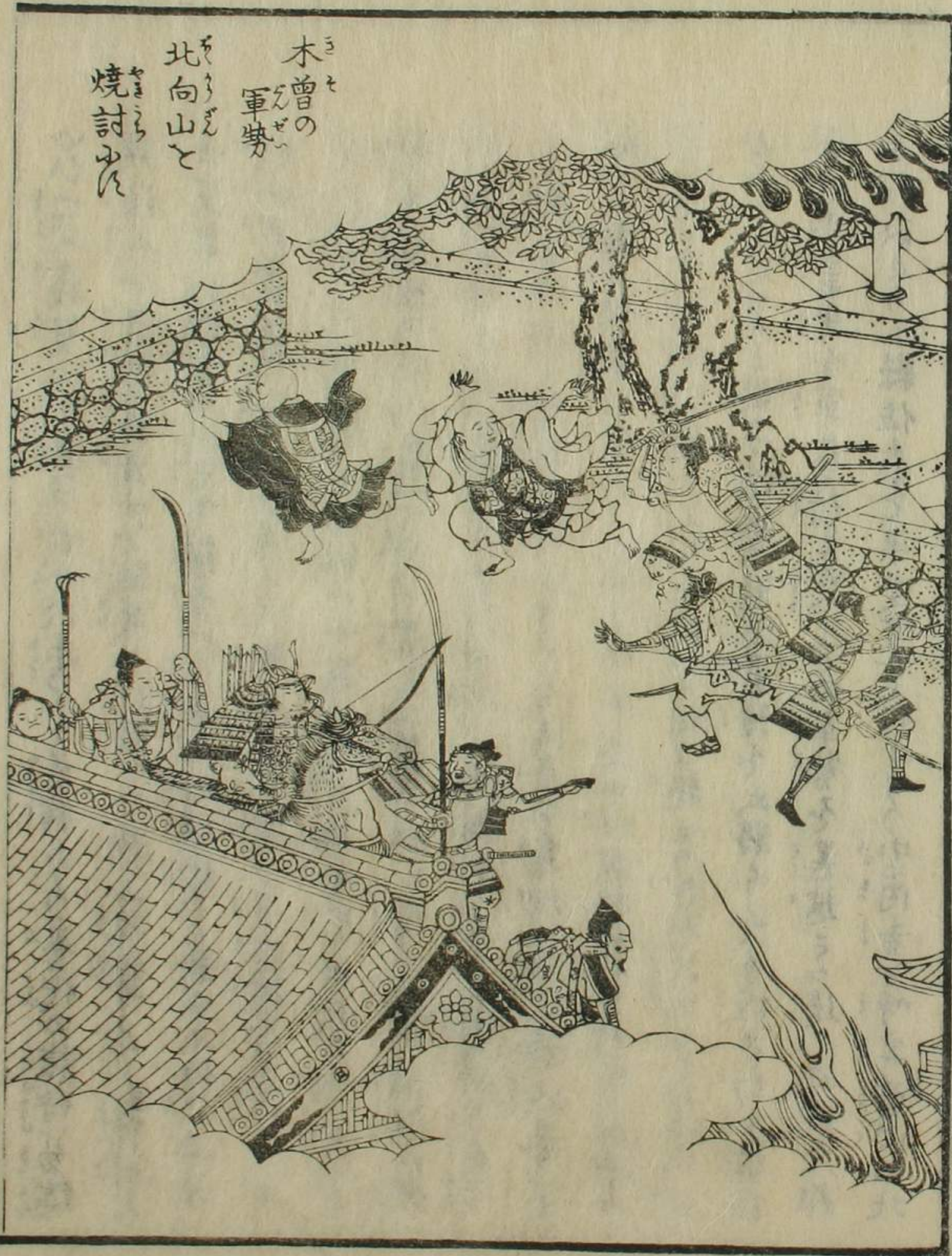
出くろりける功有り于時八代高倉院の所宇治義年中信濃と惟茂

將軍十三代の孫越後の住人城太郎平資永信州半園添領して威を

近園小振ひらら北向山の先祖より代々折願すれれば心を添らるる

天下の政道狼なれば源氏乃一族所ハ蜂起し治義四年前右兵衛佐

源頼朝伊豆園小義兵と揚々信濃住人本曾冠者義仲山云と



ひひ父義賢より異なり古今に秀なり勇将たり晋代の諸侍に勿論
諸浪人を召抱へ野武士と驅集め北国より都小攻登りんと壽永元
壬寅年北国より我方向有て條原に合戦し討勝續く越中の砥並山俱
利伽羅谷に一戦し勝利を得く比叡山より責登り平安城と見嵐一本
曾代大軍天地小響く餘波小平家此一月月卿雲峯武家の人々大い小
驚き福原の新内裏一の谷と落り義仲都に代り西乃洞院小館
と搦め我威を振ひ奢り平家に十倍一月卿雲峯を芥の如く見下
し神社佛閣を破却し勿幹なくも法皇を鳥羽の行宮に押込奉り
押く朝日將軍此宣言と蒙り今井樋口伊達根井等以所々の持口
を固めさせ公卿殿上人小無禮言語を終り生國を以て佐州残
らば平定せんと嫡子清水の冠者義隆を大將として手塚を即光盛樋
口次郎兼光を軍奉行と定し十方の軍勢を差越さる進み筑平郡
と切取より小縣佐久を平定せんと村より案内者と呼寄尋問ひ北

面觀音領廣大なるに滅しヤベ併東國無雙の大伽藍左右なく
破却せし勿幹より一應相談し及ひ無兼引時即時小押寄
受取べしと暫く野陣して休息を今もけ丹を
行の平と云まより山越に
陣と取る手塚光盛が陣行の手塚村あり
樋口陣も樋口の手塚の内なり清水冠者の陣野倉村の
清水ありいす十八歳の女
別より若大將いさや出浦を遠見せんと下郎乃袴小省一百姓の孕馬に
茶鞍を打乗り山上より駕と見え手塚樋口と本陣に召さる我北
面を物見せりし影これ大伽藍左右なく寄人もむすまら軍使し命
しきり返答承りん手塚書簡認めしきよと其文子曰
慈も皇恩礼い今度依旭將軍命信州一國く寺社領越後領
越前一帯以辨先請取の中を蒙巖命早速致出馬其其地
を双く其地も及兼い併往昔も多僧寺社を廢たし其意を
わすれし不誦中轉いそを奉意事いり三百段文く地を致返す
乃お残地村里を吳依以帳面てお返り返答於延引す以

軍勢之弱以早く有るに返報納入の由に於て

壽永二年 癸卯の月今日 手塚太師光善判 樋口二師兼光判

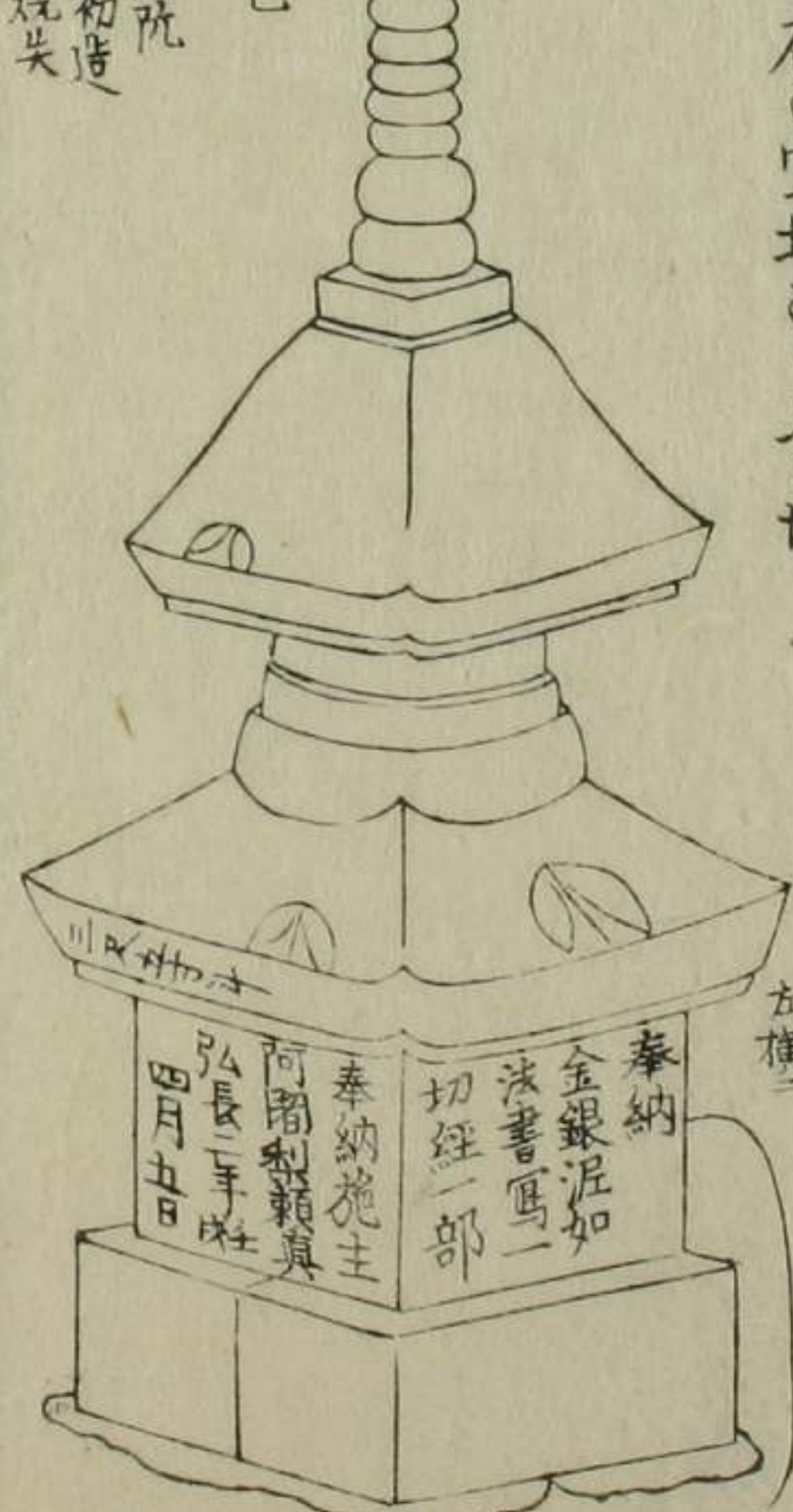
後上 三樂寺 執事役人直中

右の書状持来し子細演説を仍て北面の大段へ三樂四院令合し
六十坊の大庭にお傳る評議區少て一決に時常樂寺乃座主高海
阿闍梨作もるの折當山に 淳和帝勅所少く寺領も 淳和
清和兩帝より海等附少て武家より賜る所あはれ
天子御代に清願寺より所小本房系仲我妻に寺領を減せんと尤
傍若無人かり併及云候時破却せんと不任使僧を遣返状して寺
領減少のより兩将にお款を得心すべし半分用捨あはれ旨懇勸し預ひ
いふふ至情者どもなり共許容せん大衆の中成佛坊室幢坊弁舌巧され
本房の陣所や一山の為篤と利解せん之則兩僧陣所に赴く事

塚樋口出陣客屋小伴に礼終りて越えされ 答書持来し折我
山に天長のむより代々の帝勅願所少く爾にれよりお伴の即兩将
曰我々此處出陣の事北面一山の儀より當園一圓可納取の旨
嚴命に依てかり如何に致さるる私の計に成るる早に地帳面を
相渡さるるに退き帰しりる兩傍案にお連して事々々々
茅と達しりるに又一山評議あり成佛坊惠順中より本曾陣の根子
又渡りし處兩将の為許りしに詞を委せしる兼引見本なり本房
が出陣越後へも聞えりん此方より逸早く城の錯へ注をり一山蝶合
せり塚樋口を退けり我山も安泰なりと伸りれば各是小同ド若
侍二人早馬ゆく越後の府へ注をりるに兩将竊小老功の侍二人間
者として賤と躰小出させ大道小酒小酔臥し系指人の咄を聞き
して立歸りしりる此日頃朝小幸よせ目を送り竊に越後へ加勢
をとより事延引せり由り後大度なりんと城郭の用意と来り

注進此上ハ朝時小押多一字も不殘焼拂へ其夜十方の軍勢
 松明を用多し油跡を足さるゝ忍び入救ふ所の寺院小火と銘り
 折斎魔風頻小吹く夢を並へ大伽藍寺院町家民家と一端小焼上
 は思ひおさる幸るとい上と下へと騒動も俗男女は焼亡し更なり
 嗚呼今日つらる日ぞや壽永二年卯五月廿一日は東国一の大伽藍一時
 此灰燼と成りたる本曾の軍勢十方より録は天地に響け押よる下畧
 金剛山常樂寺 照明院と号は天台宗属 東嶽山三樂寺の其一なり 本尊弥勒如来大悲殿別當所なり
 此寺の裏の石の宝塔あり入の塔と云

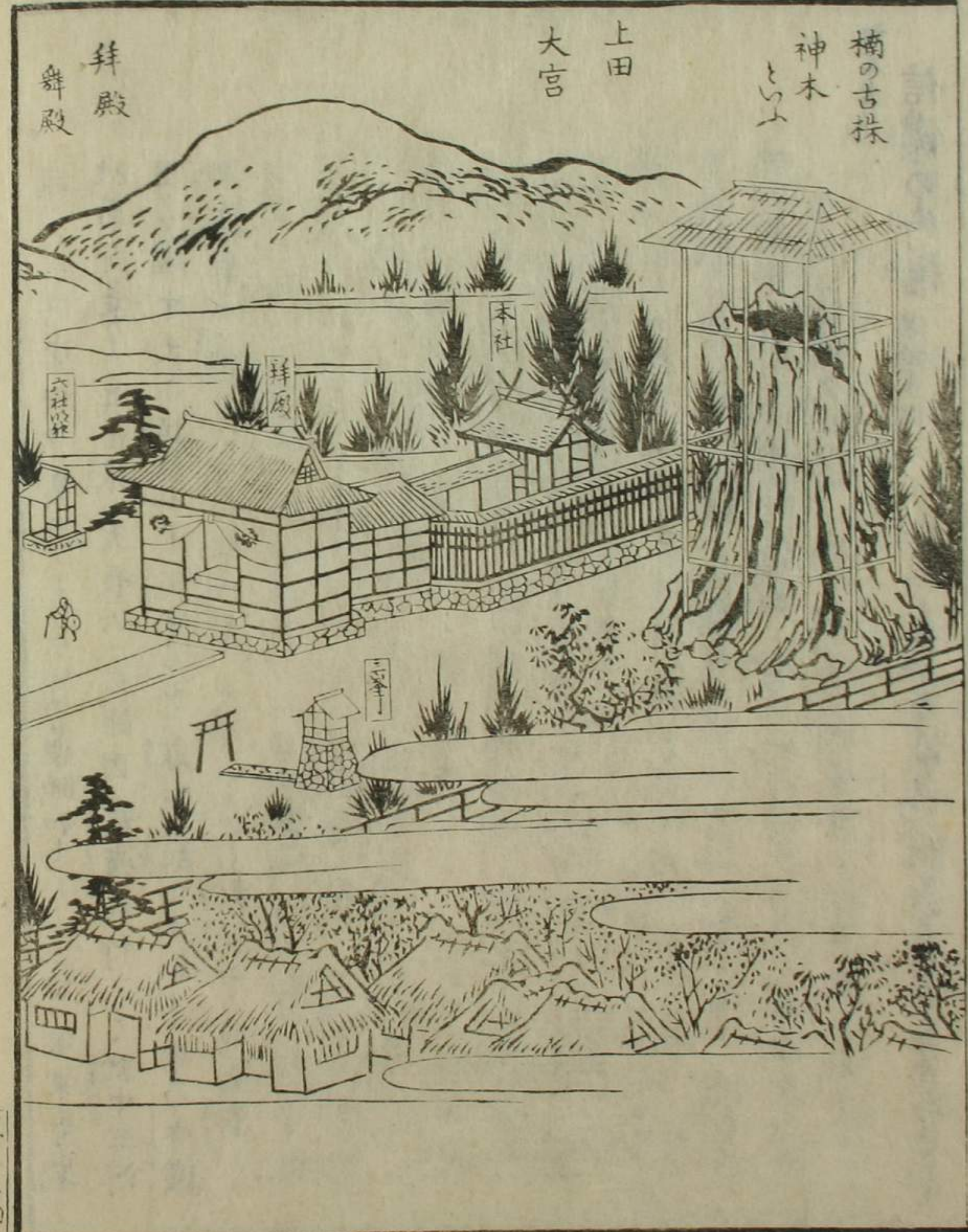
惣高九尺斗り
 叮ハ錢の音あり
 後の方ハ
 文字生ぬ
 十月二十九日
 北向觀世音大陀
 出現之異場初造
 之室塔壽永焼失



大勸進
 法橋上人位
 入禪
 別當取立者
 性筭
 弘長二年庚子
 天保三年辰申
 九百七十二年

或曰別所常樂寺裏の沢より出現の薬師如来今三州鳳来寺峯
 此薬師是なり其由縁ハ天長六己酉諸国疫癘流行して就中三河
 國々国中大小煩ひ卧し死する者麻と乱きが如く國乃守護
 職帝都小奏も依之安部西家へ天災い々と勅問あり西家奏く
 曰是を除んふは信州小縣郡出浦小出現の薬師仏と替く彼国小移
 し移す安隱なりんと勅答は則三河の國府へ移し何方に安置
 せん郡司として改しむ爰に尊き靈地を此山へ昔利修仙人山
 居せし靈場をといはる假殿を建て安置せし一七日に回法華經藥
 師經種々大法會修行有るれ次第に時疫減り諸民大に悦ぶ是に
 依て如来を替く借なり交りの告文をなると因て出浦の高望云(論命
 下)三樂四院(奉)借澄文三河の守護より越さる
 此院文三種二年に本堂焼失とい内
 陸小納有(其)外宝物尤小は時
 七き 依之三劫中平ら寺院を圍を堂と建業師如来を移しなる
 さる因縁小依く北風吹時ハ信濃風と唱へ古藤を閉く依く風来寺
 峯に薬師と稱し靈驗今に掲馬一禁に町屋軒を並へて建連わたり
 但右の古澄文焼失後三列中風来寺と改号有し形也

地名考
 信濃の清湯 其地未詳 八雲抄
 志方なる信なり 地名を考ると甚か



依く此地を考へ及びざるもよやな後乃明鑑を待の

小上田

海野へ武里長瀬へも二里松平伊賀守居城ゆく五万八千石と領せし
城下は町長く一里八丁相對して巷と成り繁昌れ地有り産物よ上
田縞細縞白細かと近在より織物城下少も織屋呉服屋ありく
諸國へ送る又上品の織物を制して一都會といふ

○大宮大明神祭神諏訪末社。六所神明。駒形稻荷。天神以上本社の右小の
神木楠の古株。三峯以上本社の左有。舞殿。朱の鳥居。石橋。手水鉢

神木傳

信州上田城鎮守常田大宮者其神創不知基於何世也相傳
昔時大明神爲其孝敬自構神籬永爲國家鎮護爾後爲民
爲國詔初預附置神部神地稱須波神宮矣然後世兵亂相繼
失其事實至慶長中真田侯崇敬之餘存其一二者侯之力
也祠東上南面一字二座中殿無扉蓋依旧貫社頭有神木一
株里諺云昔繁茂之時朝日之蔭到諏訪部河原夕日之蔭到
園分寺上坊今僅存者高丈余大八田余元祿中仙石侯志友

其腐朽假加雨蓋爰室永中今侯移封於上田改造之蓋以
傳無窮正徳中殿舎造營以來人弥知神徳之大也

○浄瑠璃山國分寺

天台宗屬 東嶽山

本尊藥師如來

行基作

上田より一里小縣郡白鳥

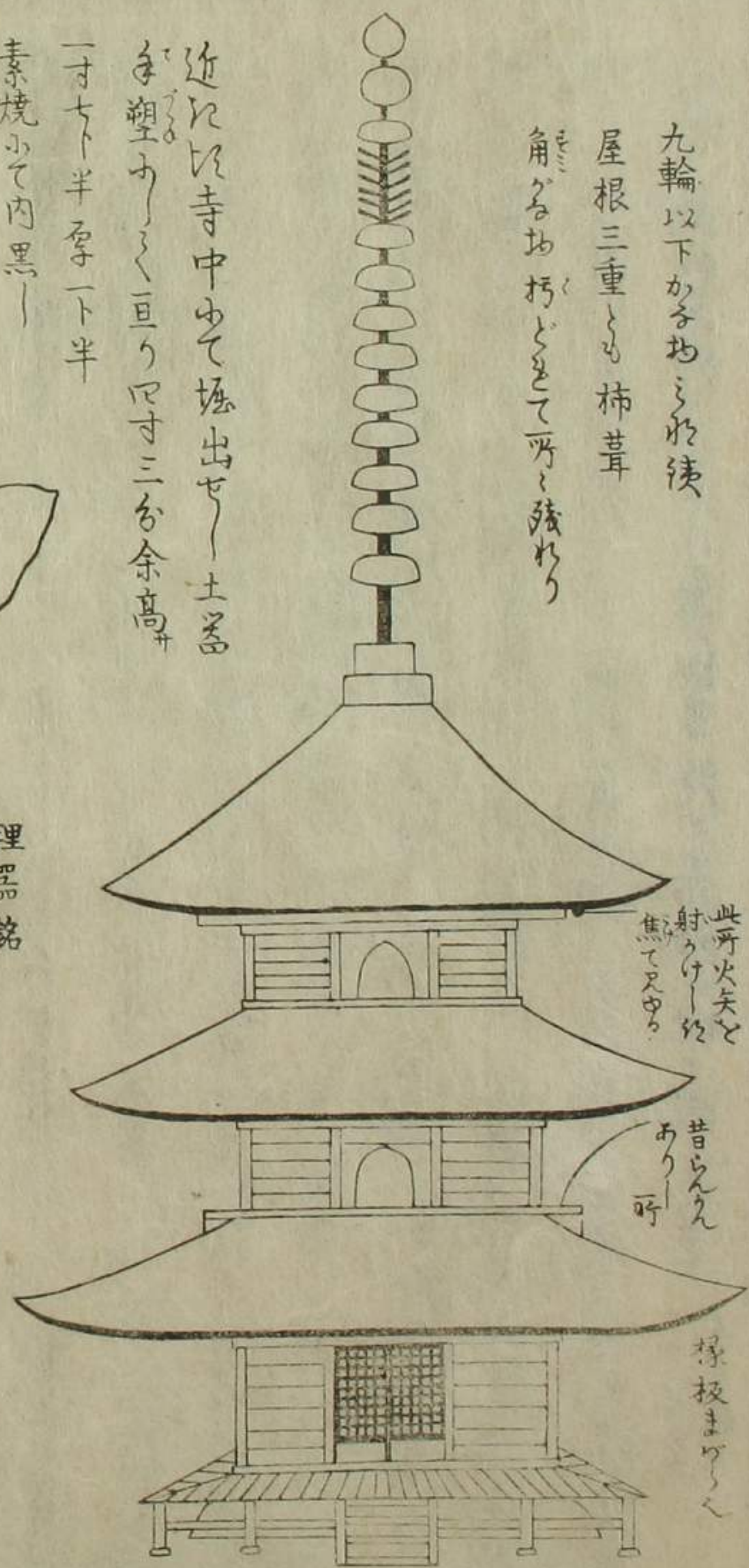
庄国分寺村より真言院と号け縁起の趣へ皇四十五代聖武帝御宇天
平九丁丑四月八日行基菩薩此地小巡りあり清淨なれ折柄いつともかく自
然と薬師の陀羅尼崗へ桂の木に一切衆生病苦皆除受安穩樂といふ文字
現り行基歡喜して浄瑠璃世界より醫王如來現し現りたるとい桂
本を以て手自清長五尺八寸の薬師如來を剛刻し草堂を營み安置し
終る則聖武帝勅して堂塔伽藍と建立せしめ三百貫文の地と清寄
附之依く三十六坊を立く伽藍を外覆し香花燈明の役寺に備ふ扱又
後鳥羽院御宇右大臣頼朝卿より前小勝もく再建善美盡せり日光月
光の二并安阿弥是を作り十二神將の運慶作其後慶長年間上田乱伽藍又
灰終と成り薬師の像と三重の塔の残て荒敷の地と成りたり

已上縁起の
まを採る

九輪以下かき地より後
屋根三重も柿茸
角各均巧とて所々残り

近江以寺中めて堀出せし土器
手塑少く巨り四寸三分余高
一寸七半分厚一ト半
素焼して内黒

日本書紀神武天皇天の
香久山の埴土ととりて
八十平瓦とみりく化り
ゆくはて諸の神と祭り
天下と謚させぬ其土を
とる所と植安といふと
さうこれれれ類小もつらん



理器銘
天照大神之御子弟二忍穗耳尊御作
傳日本武仙要門之御書段々臣家有
御讓而天理以討乱誅暴其天民助背
天理害者人民者伐本正而无私者也戰
天之命也奉神古者八簋用今二簋享也
當代國分寺法印院内示而鑿土今珍古之
理器求是是尊寶可貴可敬也

文政九丙戌五月良辰

沈醉馬日利

野田光謹記

海野小縣

因ふ云國分寺並國分尼寺天平年中に建南都東大寺と惣國分ちと
き主税式國分寺領四万束とくく古諸國の國分二寺毎正月八月より
十四日と轉讀取勝經布施三室系三十竹僧尼各絶一疋綿一屯布是神護慶雲
二年制らる所見へり今猶八日堂と呼り是之國分寺の講讀師諸國
分寺金光明寺六六件と建各造七重塔二區寫金字金光明經一部講師
と置て一國の僧尼の司と延曆寺並諸大寺三綱任之と統日本紀ふへり
加賀川 深山深山教多乃溪水落合合千隈川入なり慶長の以上田勢國
分寺と本陣とて廿町程東へ張出加賀川一の柵と構へり
加賀川の橋と渡り大矢村海野新田と過て程多海所宿ふり
又大矢より大別き千隈川の橋と越し長湫腰越を経て中山道の
長久保宿へ出る道あり大矢より長湫まで武里十六町といふ
七町程相對して巷とる民家多町中以溝ありむう本宮殿の
侍守野平四郎幸氏といふ者住居の地は田中十八丁あり小坂多

上田
呉服店
上田織と
名産と次



白鳥大明神 海豐郡町中 左例小あり 例祭八月十二日相撲ありて近里遠境の角力取成

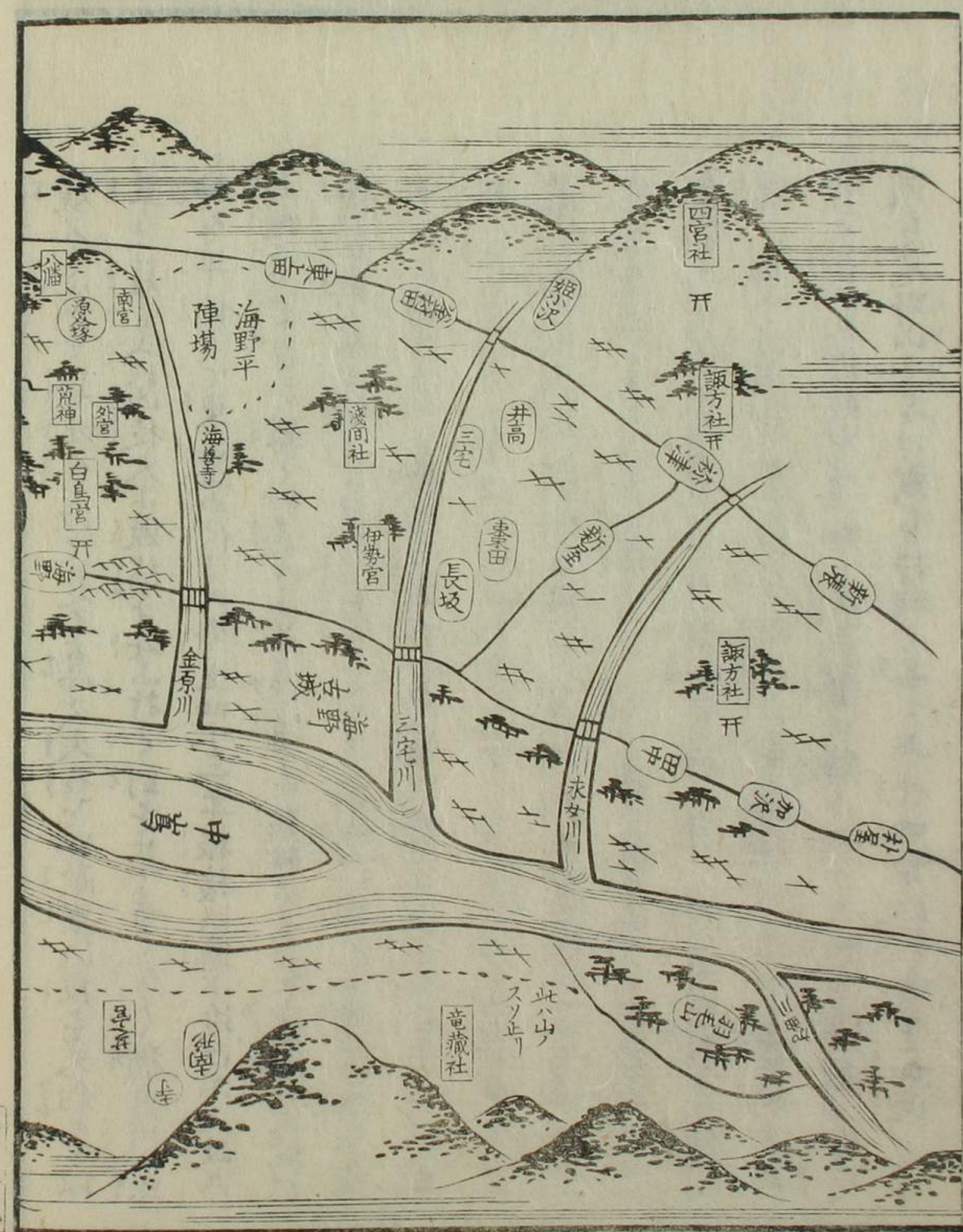
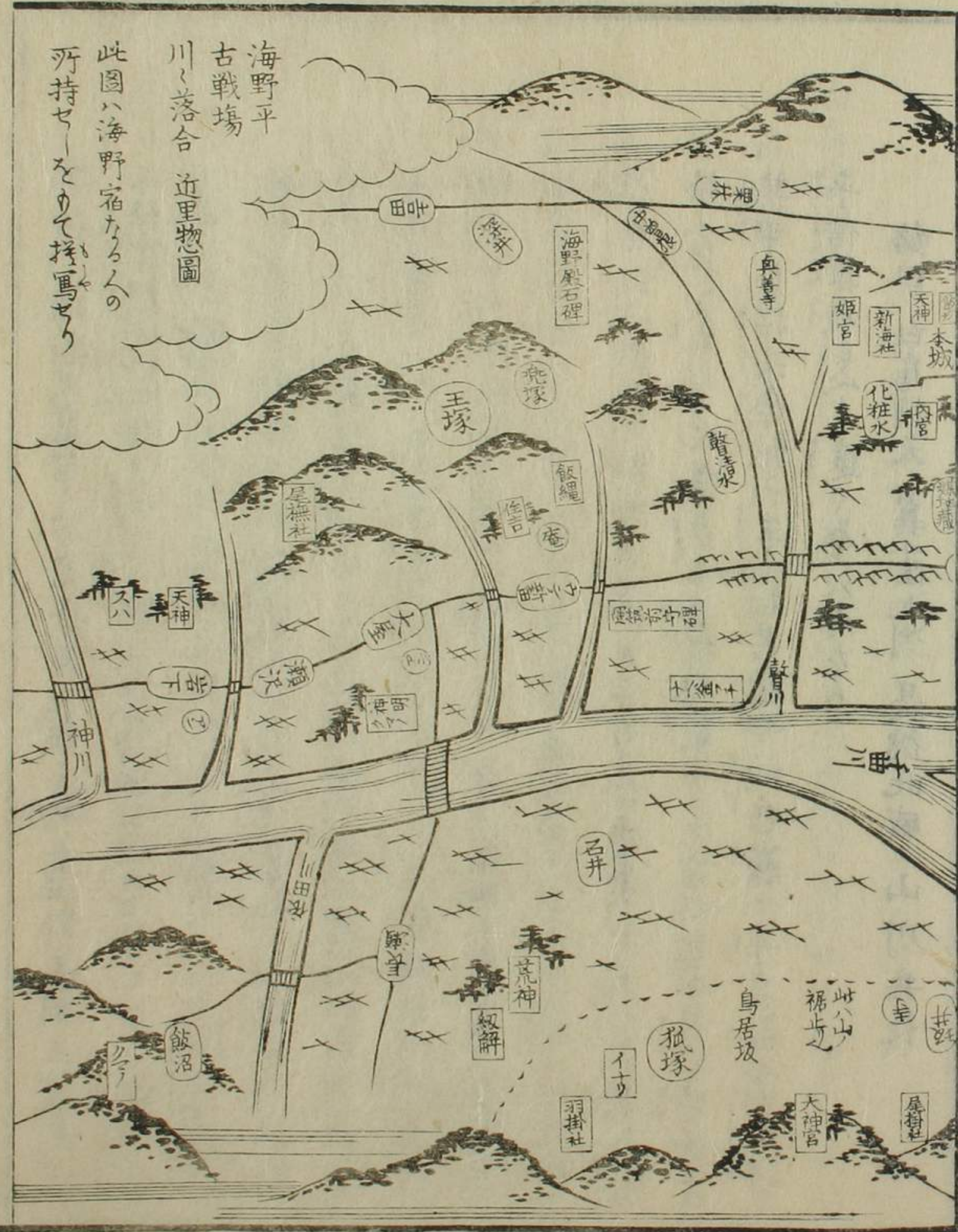
寄集て見物の貴賤群集てかへ上田村士民多し 神主 石和氏

社傳曰

粵に信州小縣郡白鳥庄海野邑白鳥宮の岡岡以來既小此丹千五
百年其源を尋ね人皇十二代 景行天皇の御宇に當て丈經武
緯天地小則て德化仁政艱寡に及ぶと儲の君皇子七十四人有之茅二
日本武尊第四稚足彦尊此尊登極乃後成務天皇と號し奉
る天下と治るて五紀ありて崩し於し御兄日本武尊神子足仲彦
尊を立東宮とて終し所謂仲哀天皇也蓋日本武尊は德を太伯慕
て輔佐と以任とて多し景行天皇四十年夏東夷逆亂上帝日本武
尊に勅して是を追討す尊伊勢天照皇大神宮小參詣して是を
奏と則るに天叢雲の劔と贈て於し於し帯と東征を尾
張松子嶋源太夫の家と次して岩戸姫と閨房に見て是を妻愛はる
任の重と以遂に辭去駿河國小到る凶徒火を廣原と放て尊依

燒んと欲も尊水石と以て是を息又火石と以敵軍に投も又劔を以
草茂蘿より凶徒大敗績す此小於し劔を草蘿と号し猶奥州の悪
神を平釣して東夷盡伏し今上四十二年振旅に適し近江小八岐乃
大地天靈道を塞しに遇り尊踊躍して超越も其足少過て大蛇に
毒に中熱氣太熾して身心忍難し足を澗水に涵して漸其熱と減
む此小於し泉を醒井と名惱心尚甚し將小陪臣武彦を以て東
征の獲と奏し尊遂に千代松原に崩し多し其神白鳥と化して
飛去初紀州名草郡に降り又尾州松子考に飛去のふ
天皇郡國小勅して其止處小於し祠を建て是を祭る其後信州小
縣郡小止時よ民天札を年穀熟き此小於し郡吏民物その徳と
戴く祠を建是を祭る水旱疾疫必祭福祥吉事小も專祈る其
靈や影の形小應むるが如く響れ聲に隨小似たり近里其徳と望て
或る尾野山と名け或る片羽と名く其化四方に行ると如此

海野平
古戦場
川々落合 近里物圖
此圖ハ海野宿から人の
所持セしをりて採寫せり



其後 清和天皇第三の皇子貞元親王御子滋野善淵王信濃守
小任^え信州の太守と成^な入部^{まが}又白鳥宮と以尊信^{えんしん}一^い瑞垣光
と放^{はな}ら宮殿輝^きを合^あむ其子孫海野氏貞元の靈^{たま}を白鳥に祭添代^{まつしろ}
是を尊信^{えんしん}も年往年来應仁大亂の後信^{しん}中屢乱^{りゅうらん}滋野氏彼處戰
此處小敗^{ちこ}して遂^{つい}小以迹^{あと}を昧^ままれ遠孫尚他郡^{とん}に徙^{うつ}依^よ之靈祠^{いんじ}日以頌
き瑞籬^{みづき}月^{つき}敗^まり凶年^{きょうねん}民力^{たみりき}修復^{しゆふく}を加^くら不足^{ふそく}靈神怒^{いんじん}て郷里屢
燒^や亡^なも夫神仏^{ぶつ}の兩道^{りうだう}世^よ小御^みさる事^{こと}車^{くるま}れ兩輪^{りうりん}の如^{ごと}く鳥^{とり}の雙^{たわ}翼^{よく}異^いに
似^にたり今^{いま}梵宇^{ぼんう}此世^{このよ}を導^{みち}く有^あて而^{しか}も靈祠^{いんじ}の人^{ひと}を心^{こころ}を無^なし嗚呼^{あや}可
悲^{かな}乎^や此^{この}小^ち於^こて丁壯^{ていさう}努力^{どくりき}して土^{つち}をた^たび耆老^{しやうらう}心^{こころ}と勞^{らう}して材^まと鳩^と
海^{うみ}の年^{とし}と出^{いで}たりて落成^{らくじやう}も爽塏^{そうてん}精嚴^{しやうげん}りて宮殿^{みやうてん}古^{ふる}小復^{ちよ}も即^{すな}神主^{かみ}
某甲^{かみ}を招^{まね}居^ま祭^{まつ}祀^{まつ}小主^{ちよ}む其威^{そのい}や淺^{せん}岳^{がく}巍^い乎^や其澤^{そのせき}や曲^ま水^{みづ}洋^{よう}
乎^や信^{しん}尊^{そん}敬^{けい}ま^まく遠^{とほ}く後^{のち}紀^き者^{もの}なり

銘曰 白鳥搏天 翼蔭九州 是德此威 山川共長

神詠 白鳥乃和幣帛於取添天祠曾始留古乃海濃野爾

白鳥宮鎮座本記上畧 高翔^{こうしやう}指^さ科濃國飛來留海野鄉御鎮座奈利此

節白鳥乃羽^は乎^や懸^か女^め賜^{たま}布^ふ所^{ところ}乎^や羽懸大明神登奉祭留又尾^お乎^や掛賜^か布^ふ所^{ところ}乎^や

尾懸大明神止奉祭利即白鳥庄塩河郷奈利右兩社乃祭神日本

武尊^{たけのみこと}奈利中畧人皇五十六代清和天皇第三皇子貞元親王乃孫乎

善淵王^{ぜんえん}登奉申于時五十九代宇多天皇御宇寬平年中^{かみ}初^{はつ}且^{かつ}海野郷仁

御居館^{みゑ}乎^や造給^{つく}中^{ちゆう}略^{りやく}從是御代^{このよ}海野^{うみの}介^{すけ}御住居滋野善淵王五代孫平權

大夫重道御子三人廣道^{ひろみち}海野小太郎^{うみのせうたろう}道直^{みちちか}補津小次郎^{つづみせうじ}廣重^{ひろしげ}望月三郎^{のぞきつきさぶらう}号藏人頭

右三家^{みぎさんか}登^{のぼ}成^{なり}且^{かつ}各所領乃郷名乎名乘代^{なせりしろ}其^{その}所^{ところ}住居^{すまひ}中^{ちゆう}略^{りやく}文保年中改^か介^{すけ}

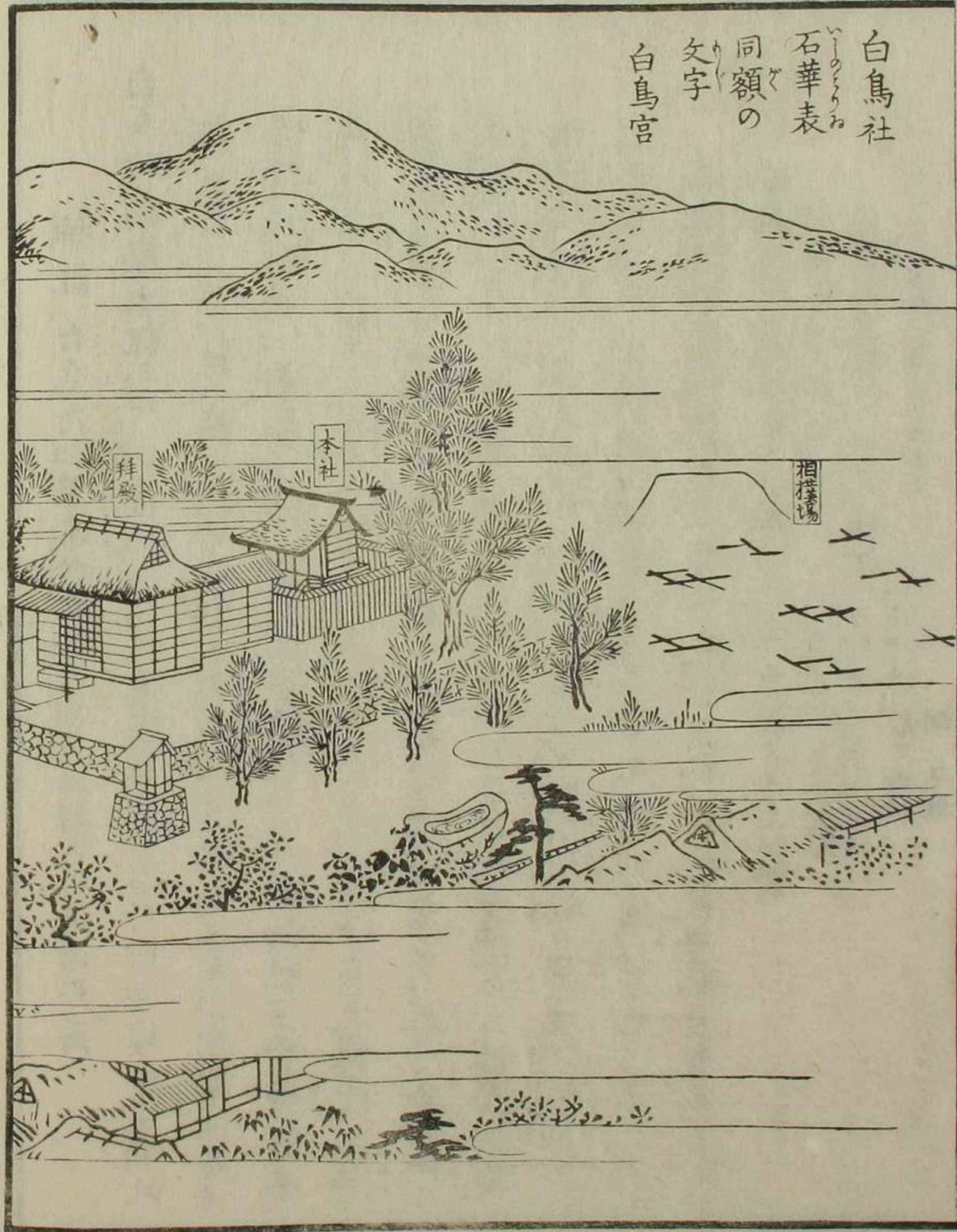
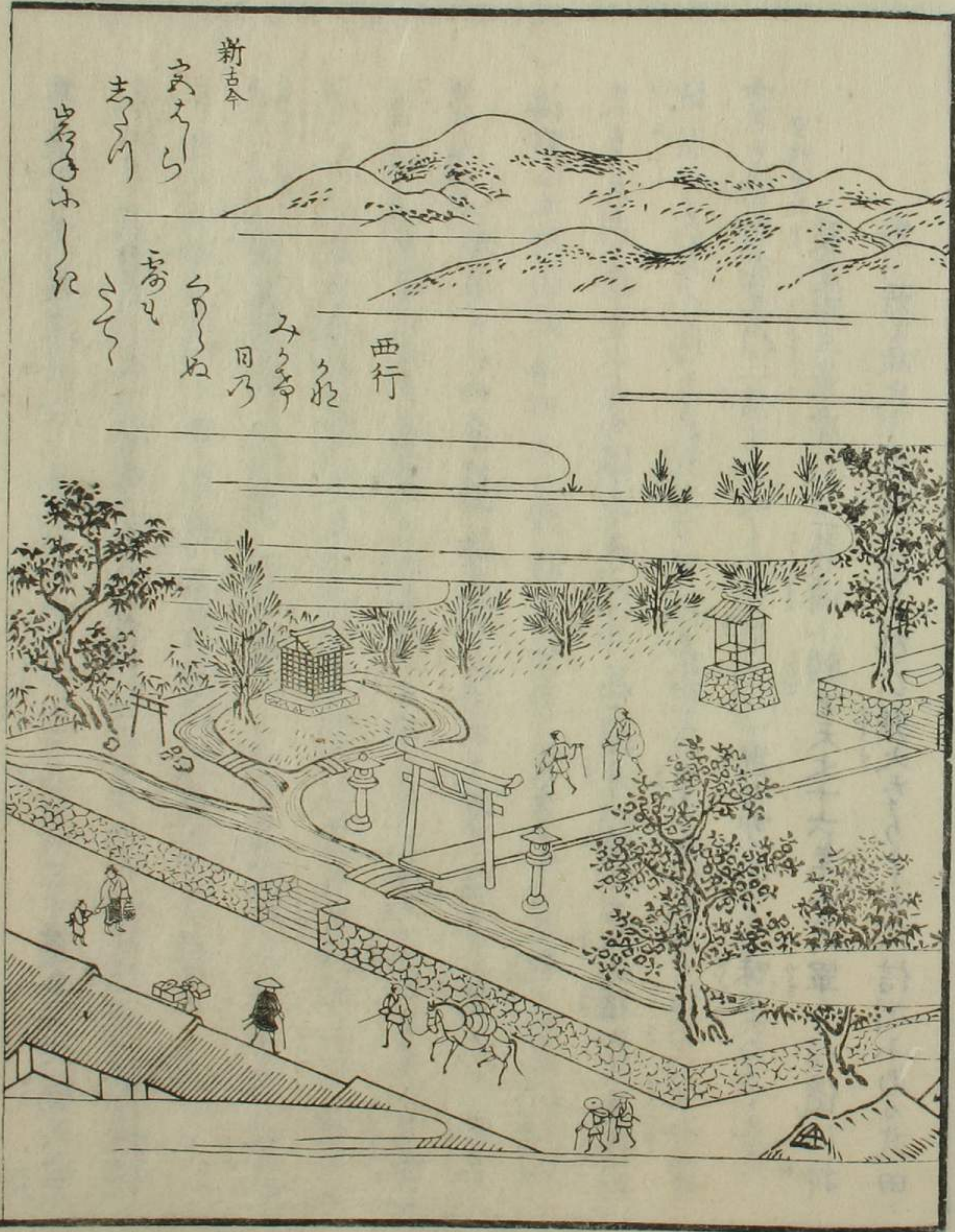
白鳥宮御本殿九尺皇子造幣殿神樂殿一宇成就并社地東西五十七

間南北六十間社領二百五拾貫文 其後再建之棟札二

寬正二年八月 白鳥大明神一宇再建

神主白鳥豐職 大工菅野權兵衛

滋野氏幸寄附加之 高力修理 關平助



其後累世の領主修理と加へらる社外に慶長の以三千貫五百文猶又寛
永以より三貫五百文に成来りしが寛保二壬戌年八月朔日洪水此社領
を流らば流失せし今を漸く三百文の除地なり形也

文治二年夏
尚社外流る

建久二年三月

享保十年春

寛政二年の秋

右乃海野清き流きふたききりて初て表世終りむ 海野幸氏
久堅れあふ小飛舟一白鳥のこほをまわひまんりてききき 笠原英詮
かききものこは神のゆへ幣もけふあききりてりく里人 ほかり

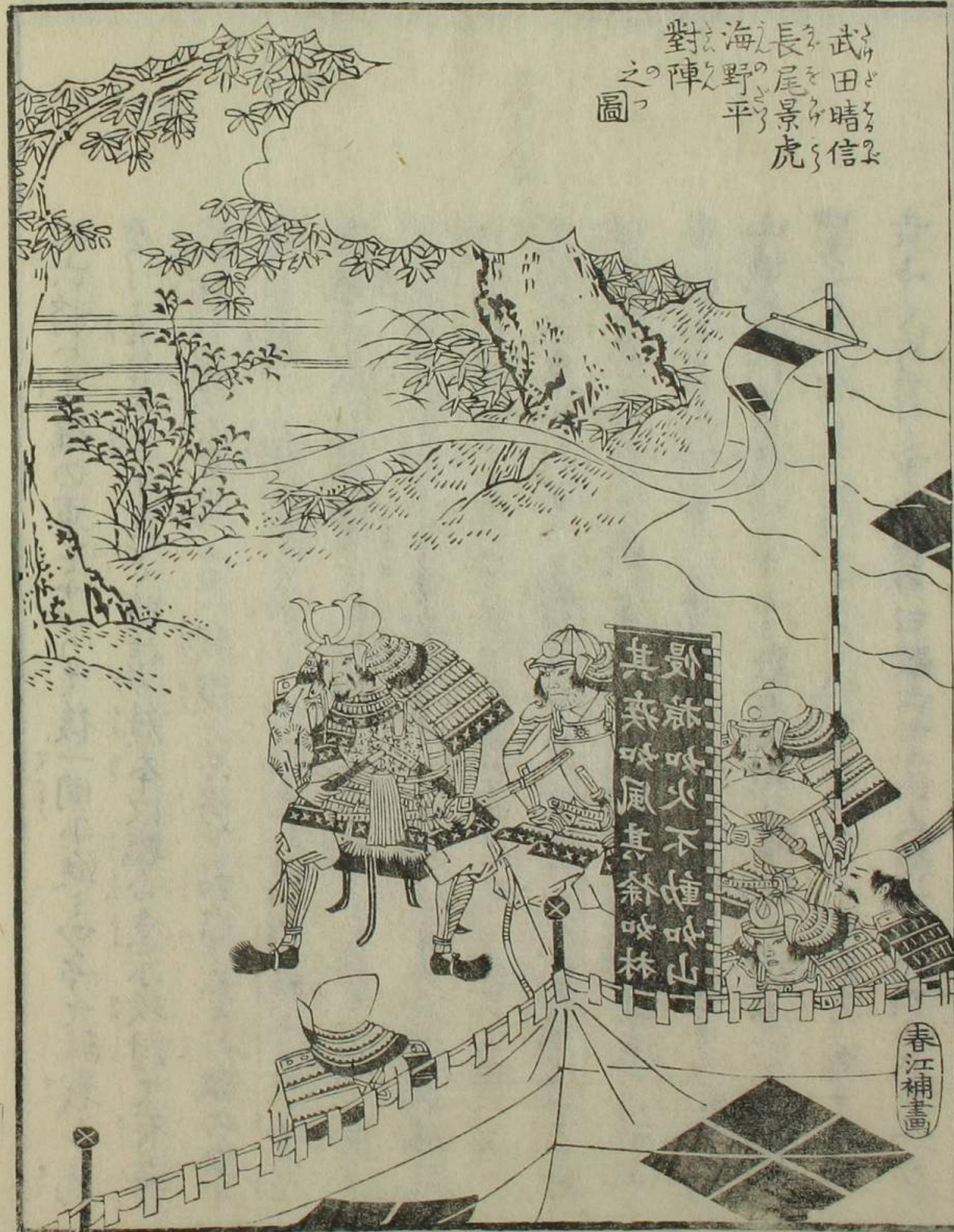
○海野小太郎城趾海野より四丁程東北あり其きりて六軒と字に 町家の法
夫より又五丁程東に源介塚とて五間四方高二間斗れ墳ふ右松一株あり其傍に
地梨子といふ木高き五五寸あり枝葉四方に蔓ア花大き紅白の咲分あて
實を常の梨子れ三倍も有べし其形 ○斯の如くあり味美なりとぞ
甲越軍記より 長尾平三景虎の村上義清小頼と天文十六年十月軍と信濃に押
出し所を放火し民郷を侵き勢ひ強大なりしは信州小ある武田

の家臣属下れ緒將より甲州小往進きて雪を飛りて如く武
田大膳をま晴信干時二十七歳少くも驚き上田免れ合戦の後
村上左衛門身のイ成りて走りて向べ板を景虎と杉本先乃
耻辱と雪を結構なるとて同十二日甲府を發馬ありて小室
に着し十九日海野平小をいり戦ひを交んと備を押し板原
美濃守虎胤小幡織部心希盛山本勘介晴幸三人を呼んで申
ささけるに長尾景虎父の敵越中を捨て我國に軍を出きてこ
村上小頼を義我を守れ戦ひかき勇と勵之名をいりむ一戦ぞ
り其上景虎若年といへども項羽も欺く勇將と聞く必定十
死一生の働きあふり尤大事れ合戦なる間汝等よりり付候
して見積り来りてありて各畏り馬を馳出敵陣近く
進むと下墨し立歸り原美濃守十々を敵にたる程合戦
と持備へ暮るる人救を六千の内外ありと告げ山本勘介

敵の備速る中れ濁とやおゆく合戦を持て持て始々當
手れ取合なれば備の作法甚嚴重ありと申々まはらば備
と定むべしと高議あり山本勘介曰越後勢を別手と考て
組合せ一手れおゆくに四方より又鋒矢は備て乙矢と堅くと
ゆい清味方も備を方向小なられ一手二手に分跡を偃月小立
右の方と鋒矢は傷入清藤本は後へ雁行小立り懸く待たぬ
ぬべき如何おゆりて午の刻近會釋して時を移し給ひ味方
の為吉刻まで候なり味方勝を存せざるに敗せざる術を
結り敵も次第に弱味方勝利と成るのあていと申々
汝がや所一と理小當よりさるる備を立べしと陣を鶴翼
定めらる中略越後方にい長尾景虎十八歳宇佐美駿河守定
行と軍議ありて備を龍の丸備小立諸軍へ令して曰一手限の
合戦は我家の法に進も退くとも他の力と合さるるに二陣

海野平合戦手鑑

此六將の先備の軍とやうて後一回小進のあまて乱戦を為
せし吾の其虚小のつ晴信が旗本に驅合急小攻討て有無
の一戦と遂む甘粕上田の我進とも勢を勃はるか敵の進
来る時待て速小是を討べし竹俣色部山村の援合より奇乃
を進んで其敵を討らせ被馬奉行の遙小下陣氣と揚下方
軍危く先手破れ政景討死するまは柿崎是に代は柿崎又
討てまは柴田道壽代で勤べしと嚴重以下知と侍らる下畧
天文十六年十月十九日越後長尾景虎信州村上義清小頼やうと
海野平にて初めの合戦に甲州方よりお見え原美濃小幡山城山
本勘介三人佐付くる原美濃曰敵人数は六千余と申上り
山城曰速中の中濁りと申上り勘介曰別手と寄る組合一手の根は
四方へ見せ鋒矢と刃いと申上り信玄公場所へは問あり各申の場
吉ゆく片寄と申し勘介曰敵六七千の人扱一手の根は八ツ九ツ



小行と分一所小寄て能き場と一方残い敵方便と見出し
敵越る時ハ鯨波小動て七曜の町間を利則會將の戦跡矢に勝負
とて究とやよる公の信小味方の備とよよる儀有り勤又曰味
方ハ方田小を拒一手と二手に分て跡を偃月とナク敵方ハ矢と
望く留らと押と五町右小是と絆矢を小ハ津旗本の後と雁
行とナク掛てハ待合路ハ一万五千ありハ間働の手配能て
大山明無之釘楔と堅く在信付ハと有り右の内先小山田古備中
二ツ我旗本と中ハと相組を左右の先ハ後ハ九段皆方田の横
兵小備て惣ハ旗を面ハ一行ハ出掛てハ月ハ依く待左の信先と
郡内の小山田左兵衛相組ハ改皆方系小福ハ備張出ハ方田
小と間一町余退さ左を束縛さる表ハ絆矢ハ九厄小備ハ中乃
内先ハ栗原九左衛門相組回頭と先ハ登と表ハ出ハ二組左右ハ
次間と開く二組置中跡小間有く左門侍さる前備ハ真田弾正

相組二ハ先ハと備さる皆方田なり左備ハ馬場美濃内藤終
理右備ハ勝沼典厩後備ハ穴山伊豆日向大和跡ハ遠く原加賀守五
町右ハ津旗本ハ頼よりサハ張出ハて飲富兵部上下千五百の人
數絆矢小備ハ先ハ方大方方山左右後ハハ行なり
越後尻ハ左の先直ハ山城右先ハ柿寄中ハ先甘粕近江前ハ長尾
小四郎と加治と二の右方ハ黒川と竹股と色部と前二の備なり次ハ
景虎旗本方ハ右脇齋藤ト洗と三宝寺左脇ハ長尾遠江本榑清
七郎赤輪と岩洞なり後ハ柴田と川田豊前小ハ河野中ハ中条惣絆
矢ハ一備限ハ絆矢方ハ越後方より鯨波三度上ハ旗をらむけ
兵勢とけけハ直江備人氣包て大山崩ハおろく序より破ハ打
て掛る五形鉄炮表一ハ所小来ハ左右鉄弓南来ハわより長柄の士三
段ハて突来る下界

白鳥大明神の神主石和氏ハ舊家ハ其家系寂古ハ略是を寫ス如左

日本武尊之猶子縣豐壽大連三代之孫○真周大夫公成白鳥宮神主改縣氏賜白鳥姓當家始祖

滋真呂重禮都一辰豐令重豐寬豐雅豐章豐康

豐辰豐次豐久豐氏豐信豐高豐政氏豐成豐

豐昌豐明豐計豐春豐近豐房豐義豐光豐廣

豐幹豐正豐滋豐喬豐元從是未出喰損ス依之家傳有之所ノ以古書調證者也依須代不知以年号順トス

豐勝伊勢守應永三十二年豐秋常陸守享德三年豐職伊勢守明應二年豐之伊勢守甲辰四月十八日卒

丁酉年五月豐村備前守元龜二年豐筭備前守慶長十五年豐清元和八生成年十月十二日卒

豐但七大夫伊勢守寬永九年豐及七兵衛伊勢守但家李大夫伯耆守

清春我山薩摩守妻清勝實小玉川神主我山薩摩守弟寄忠左源太伊勢守

文化六己巳年保郡豐同大内藏重寛享和三癸亥七月八日卒某茂三郎三井氏養子

小田中縣

小諸武里半此町八丁程相對して巷となり民家多し間の宿といふ因茲海野と田中ハ半月代に宿役と務まり田中と出放きてたふ摺

臼宮とて一村の本之為りてあり往昔洪水あて山抜入里と押流しり時より臼の下は一時止り上臼下の沢に流せしと俱に枝葉を生じ繁茂しりゆへ諷訪を勸請してまゐす乃宮と稱す右の方千曲川の向ふに布引山とて左を浅間山の麓より此處に称津といふ城山あり昔頼朝卿の以根津甚平が住居乃地かり根津甚平鷹術巧手此事ハ本曾路名所園會に出たり往くるとべ加澤村屋芝生田深沢左の田乃中に獅子岩あり右小塊石とて花川の沢より大木の松とれ小坂と富士見坂といふ晴天ハ富士見あり諸村より五丁より西よりと藤といふあり狸老の曰頼朝卿さ置たり者今に當へると是より南七町より南殿の櫻とて大樹の樞三株あり此傍小市神の祠ありは筋に星見の井といふあり此井戸小臨るに昼も星の影又あるまじき鳴子橋とて一枚石の橋あり以上を通るに鉄の如き鳴音する先より花川に流し橋あり此流水産婦のそふ欠小用ひく安産ありといふ遠國の人を紙よきして持参して西原村を越く程なく小諸の城下に到る

佐 小諸

退分宿三里半牧野彦居城と云 城下此町凡武十五六丁お針
て巷と云 猶小路多く家数千餘是より十八丁脇小諸村といふあり
其村より出小諸より 小室元 大井の庄長倉井里といふは是の浅間山の腰流
巡る街道より上田辺より次第小尻先より右裏通千曲川乃急流なり
午頭天王宮町中左側小わり例祭六月十三日より十五日迄 神主小林市正

例年六月十三日午頭天王の神樂出まゝて駕輿丁五六人して是を昇
く城中へ入る其後所と馴て本町小出旅所を揃へて居るなり十四日
踊子若の衣装揃として町の長役れ前を踊り巡る十五日清館に踊子
舞は日とて十五歳小充ざる児童は濡く衣服装ひ髪は鬢張出
月代青く顔赤白く南鐙の刀脇指我夫より過ると不畏様とて女の
童へつゞくもれれ粧ひまゝに幾人もく町より出揃ふ道の程は父母
の控添兄弟ははひ忌癪を傍に賑やかり長らるる人い肩衣もく
是と警言固して祈り込今日旅人より郭内を赦さる折々々立のつゞ

降出く踊り中央退き出る雨の具備さるる扇と覆ひ袖さうじ襦袢
取く我家くへ急行有様なる中く哀涙は雨微アセバ例の如く郭
内の踊舞は後神主の家と云 矢町と云 訛詭歩行く夜の更なるな
む未の刻下より雨は降り降り晴へくも之は唯家毎小祭衣装の俣
たる人とも凄ひ集りて酒うち飲拍哈をりて徒然と日と暮れ

此城下より布引山観音へ三里余より千曲川の橋を渡り大久保村氷村と過
り坂谷嶮く往來の人稀なりと云 慈父小道を尋く漸く布引山に到
り子佐久郡滋野庄市牧郷く小諸より一里十丁おま共深山なり
○布引山釋尊寺藤巖院と号し 天台宗属 神龜元年行基僧正の開基なり
東嶽山

本尊正觀世音 左 十一面觀音 右 馬頭觀音 各作 寺傳なり
一山を貫つるに熱門といふ境もれ廣大なりて方角と并へて先取付左小真福寺
といふ院寮の後れ岩窟に傳教大師を安置の堂あり夫より庫裏客殿乃布と
通る護摩堂より右へ廻り山王宮をこて通抜け七間と云れ岩穴を潜り六地

藏焔魔王妹等の石像あり夫より本堂に在る高六丈余 南向あり 本堂の内と右へ包り
まゝ岩穴の中楷子を登り穴と出く子安観音といふあり是れ古き本乃
株かく佛像の形なり俚俗縁結の神と称して所々に紙を結ひ付たり其側小
近き以弥陀の本像を登り其先小蛇骨穴といふあり本堂の前へ歸り石階と下
りて岩屋にり奥行五回 中八回 其外面以西行の石像と開山乃宝塔並建世むりきりれみ
尊尊延纏り俚談小西行法師諸國遊歴の砌此岩屋に二年杖を當らしめしや
い慣せり其石像の臺に款を穿し

みと勢をくちくさし布引をりりちそめてりりきりてんじ

天平五季酉天
又外小 蝙蝠と 出よ 芭蕉云爾
浮世れ花り鳥

備又石階を下り二王門と出鬼童坂を五丁下り此先甲へある道筋之十四五町
行く布引岩なり此下れ里と布下村といふ此色千曲川の岸やて高巖數十丈
峙く屏風をまざる如きは横布二反程引たりとるやうに白く岩のぬめりて

又ゆるより山の名は負子かたじけなく里浴ふじり一姓持山のまじりに老い夫婦布を引しりり一陣
ひあり禁にまがり居るが布半程あると牛角はひて休田
の中へくはそとくは是よりして布引の山といふ

右小階子あり是を登り夫より溪の源と力小嶮と上りて阿弥陀堂と又右まのひ
うへ三丁下り鐘樓あり猶少し登りて茶師堂あり菅茸の丸を根
少堂の角なり 内は茶師仁士一神將と
安き此所より北東を遙小眺とばなり溪間山半々雲小隠ひく之昇る煙も見え
裾野と東に遠く深き谷とて事とらざ其外の嶽々々雲霞ひて自然と雨を合り
千腰川の眼下に麓を徒る人里と所々に麦の畠黄をみたり本堂より
下りて鮮なる風色月花の外乃涼又一野といへり

名寄
月乃乃みまれの約は寒かろく布引山をききとや知りぬ 西行
長明

望月驛へ中山道やへ是より二里南の方に當まいたるべし
本堂より南の山ふ村上家の侍大將藥巖寺乃城跡あり其邊に溜池蓮
池血池とて池にわたり山上の水多く清潔なり此池は何れも濁水なり

是より小諸小帰まで順道小趣く先城下れ出外小榭干橋とい橋瓜石
標あり浅間別當真樂寺道と誌き又唐松といる李魚八丁を過て龜石
の小川の端に人家三軒を大なる葺ひ此川小亀石流き来る其形皆
若竹助ありて真の石亀の如く色黒く兼く人の持持しをえけり
より遊今この路 四ツ屋平原馬瀬口三ツ屋等村何れも五丁で相対して憩所あり
次登る傍なり 其先小濁川とて四季ともれ赤濁
三丁程の坂を登り
三ツ屋村小石標有る 浅間別當真樂寺廿五丁
星の宮十丁小諸通を板 其先小濁川とて四季ともれ赤濁
浅間山の溪瀧川となりて幾筋も流せ出せ若此河のしかれ如く水源の山と氣
思ふぞ一此先に小川あり領分境の傍示杭二本建退今宿の入口小石標を
関東より来りて中山道北陸道へワリ多し手引石なり又石像の佛跡を數
くたごり小諸をより輕井沢宿迄は浅間の麓と行るなり本朝第一の地高
以往還かるより駿州芙蓉峯と退分驛人家は軒高低なりといへば邊
及圃の傍に所く石と多く積るなり浅間の麓とて巴黒くして輕一

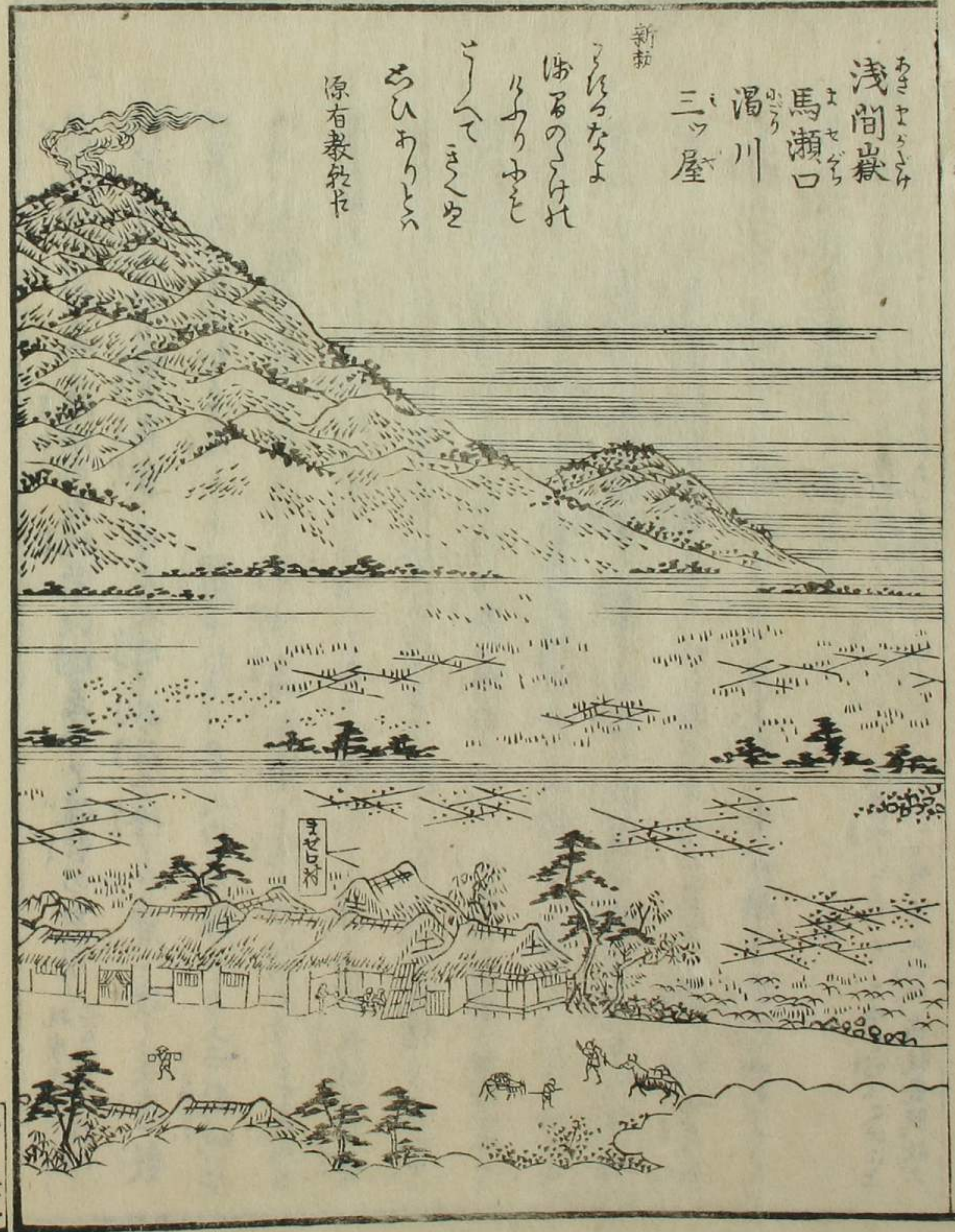
地名故 天武紀曰白鳳十四年三月信濃国灰降草木枯云今按是恐らく此山乃

異を揚るなり一絶頂の大坑常に烟之升り硫黄の氣なり 坑廣大畧三回斗坑中
以硫黄滿り時々地火突發して大石迸り砂石を降して麓を燒く其音數
百里に聞ゆ故小むり元とて四時をさし貫之りの詠一あり千巖破ら
けぬれ嶽煙のまはきまていく千載震動雲を焦ら山のまをこもる
をりせありん抑浅間が岳を國のまをりありあり深くは沢路其有
をりせありん抑浅間が岳を國のまをりありあり深くは沢路其有
叔方ち海東諸國記小此山四時白雪をほむといふ不盡の高根にさぐる
名今夏月此雪稀るとと之春の後百余日霜沍て雪のありて如く
又中秋より露寒く或は霜早く来り毛作を刺故小耕の日迫まり傳聞
むうへ寒氣強く鍋釜凍破ると今に斯る事ありさきい春の代小き流
く瀧ふりて暖なりと苛政を序より烈し今有難き順化小ありて
年の空煙も小隨へるなり

浅間の山陽若くは水あり是を湯川とて水除血池といふ又焦石を生れつて水を吸ふ又山の上
はくす雲を生れ老樹五尺にみとを壯觀なり若水翁曰衛嶽志云繁葉如刺稻霜後盡晚故名



いし年志まの国
 浅石のくけれん
 くちのまのけい
 あらうまのおま
 ひくまのまふ
 ひんるくけい
 八白園
 初き
 かくはられ
 神の
 あひひ
 うさろ
 本居宣長
 山陰
 あまの
 名やあまの
 神、昇



浅間嶽
 馬瀬口
 湯川
 三ツ屋
 新
 海石のくけれ
 けりやま
 けりやま
 けりやま
 源有教
 けりやま

風の如く神社佛堂と揺崩し四半時以本曾津嶽又戸隠山の方より光
物此山へ飛来ると見へしより此山峯子丑の間より山崎崩れは涌出
し大石大木を押し出し鎌原村をろく矢まより羽尾村へ出吾妻川へ押し込
川添の村へ押し崩れ一番の水先少く黒鬼くくくお大地を動かし人
家をろくめ森林其外数百年の老木を押し倒し土砂を捲上り火煙
をたて震動雷電は二番の泥火石を百丈餘り高く打揚青龍の乱れを
まろ如く一時小闇夜となり火石の光を天を貫くをうけく吾妻川利根
川右川添村へ己の刻以涌出し未の刻以小武州鯨谷の在中洲村を押し
出し田畑村里一面小泥海の如く老若男女の流死前代未國の事ども也村へ
田畑泥の深十五尺六尺又一丈余り押し埋れ其中に火石ありく燃ゆるを
三十四五度あり利根川並列し砂押し埋れ兩三日流を留む右川並
亡村四十八ヶ村吾妻川添村への流死人魂魄夜毎に水色に
あはれは舞止るたうは左所へ寺院方少く水施餘鬼并堂塔供養

追善有之 七月朔日二日焼ると甚しく輕井は碓氷峠坂本宿松井田
安中板鼻高崎武州児玉郡榛澤郡三十餘里の間の灰砂二尺三尺場兩
小より五六尺降り人馬の通路も絶え四日夜五時以又火坑吹出し火
石五十丈餘り高く煙乃先より手鞠の如く之を破石雨のおく降る同五日夜八
半以降同山より黒雲生れその中の一丈をうけ光おろしく廻り稲妻の
如くくく天魔乃利為なりとて法炮を撃つ小吾妻ヶ嶽の色めて薄
く成り北國の方へ散渡り右四日五日の兩日表乃如く上州碓氷郡羣馬
郡武州児玉郡榛澤郡白昼に家へ行燈をとり道行人も挑灯して歩
行を其五日の相関八州并佐濃加賀能登越中越前出羽奥州まで白死
毛降る三四寸又一尺餘り有之く又一尺五寸の石小火付いてりく
ろく飛来り落ちてを碎ゆ人坂本宿此高家五十軒余焼失潰家八
十余軒老若男女悉く南の方へ逃走り同く廿日より追りく
之歸りくく山林乃草木青紅物一葉もなく野菜等と難

義有りしとぞ於ちて法同山根に住居し猪鹿狼等山野に餌物をく
宿内焼跡へ出る故日暮ても外出れ成り殊小近所小水なく火のり
危くりしとぞり今度少く三里十一丁の間土石を押し出さるる其
中一番の大石九十五間是小準しる石ありたり
七月十一日夜に大雨大水ゆく山は積り砂石を押し出さるる
二手に橋流失く宿方も老く見水漏切き音山河動揺せり
此大變ゆく後しる村数廿二ヶ村流家千二百軒小及び物溺死
の人凡千四百人程馬五百足餘 以上書付の意を採る
予其物語を聞く胸つづをくりにん侍る夫天の生育を主ふり
中庸小も君子於禽獸也見其生不忍見其死聞其聲不忍食其肉
と云く幾許の人馬及び居家田園を失ふる畏る甚し小あ
らずや妖怪や奇怪や天変とやいん実よ希代の秘事なり也く大
山祇の神のりびかるべし

按寶永年間小不盡山大焼ありて砂石を吹出さるる一つの窟と成り
是と俗に宝永山といひ懐せりわかれ名山の姿も爰小一つれ
塵付たり其後と烟と立はかりて今いんるる浅間山の
大焼の後も今にわたりて煙疊と立昇り雨催ふ折るる烟氣
殊多しときく是との悠然と陰気に感激してうづり
陽火乃氣を増と見えたり

○雲場野 追分番掛輕井沢三宿乃南の曠野といふ名所あり
古詠きこえに獨追分宿めく妓婦の唄小競ひ謔ふより
さるる來ぬ表ら雲場れ草でかる人もれしむり寐る
のめよけりぎよ今も乃座敷あり雲場の形をあげり
凡娼歌ふ其地色に風俗をくく殊勝めく自然の雅なるべし又
此野輕井沢より南遙小眺望一古木あり圍繞る沼ゆく人の脚立さる
より此雲に丹頂れ鶴二羽栖り春毎に雛と生を成鳥の後何地行らん跡

或僧曰奥州やま雀の巢とひく
 所あり領主一達しは其者へ
 番を付しは雛の巢とひく
 跡更せし者へ其の巢を揚しその
 巢の巧なるを松枝の枝と大枝
 小枝と細重の苔と交その上に
 人參をのりし肌付ゆて卵を
 産む卵大や卵殻あり人參朝
 鮮より採あるとそを巢薪小
 積を凡三返り有るべしと云り
 右 下塩尻 安福寺説

素性法師



古今
萬世を

きんといんひつ
 ふとせれ
 うせに
 さゆんと
 押のへス



を止めば往古より只雌雄二ツの四季とも常住し時々人里近く立
渡せども神鳥なりとて獵人も是を不射とせん扱眼を究めよくと
看るに春を黒く其中に白く半月の如く一ツ又へり即鶴なりといふ
二ツ見ゆる夏と常なりとぞ 予狸老の談は依く眺望之

○碓氷峠 上州碓氷郡小 熊野権現の宮立給ふ若宮社と祭神日本武尊當山
の地主と稱し例祭六月十五日前夜小紀州熊野より柳の系降頭白き鳥
来り社内の樹木小宿まきと往古より變るる形一又當山は熊野の葉
紀州熊野へ降とあり

本宮山三首歌 ちりやうる熊野宮の柳の系とあそむぬ子代のためとひく定家
夫當社と鎮座は歴代不知社領なく古来より諸役免除の社格なり守護
不入の神地なり此巖は信州上州乃境ゆく拜殿は屋根片方信州片方
に上州より修理するなり園分け神社と自称するもは故也あむむの
神人凡そ四十五人あり 廿二軒信州方 廿三軒上州方 各家系の祖先と知らる古記録なり

古の形尊はを獨神代より連綿して此高岳に世を累の神小仕の
外亦他事なく正路なりと神代の餘風を不失神境とと謂ふ一昔
日本武尊東征一給ひ碓氷嶺より辰巳の方と眺み橋姫を慕ひ三々歎
い吾嬌者耶くと宣ひより東に園を吾嬌といひ慣しけると日本
書紀小見たり此嶺より東を眺む武菟下総常陸上野乃山と筑波
山日光山を殊に高く見たり

社鞆凶葬の事當主婿男の各の裏に葬り僧侶の吊に拘らる度子婦
人の分り極井沢の神宮寺に送る以上社家水沢河内亮話 手時行年 七十六才
此山中鹿多し秋らその群寥亮小かるるあり白鹿又の雪れ如くと
いふ又此峠を寒氣甚しく五穀乃類熟らざる野菜も形しやい
則冷際小到るるあり

附録

○信州より他國へ流出の川と其大槩

天竜川

諏方の湖水より出く
南のく遠州へ流出
約千曲川より出く北流して水内郡

犀川

みて千曲川と合く越後へ流
川上山の東より出く武州へ

荒川

流は末と隅田川切り

利根川

浅間山の後より流出

鳥川

碓氷山の北角打分岳鳥岳より出
白井蕪川と合利根川へ流

關川

水内郡野尻の湖水より出
越の鳥田へ落海へ入

此外も小川の水源枝葉を以て違わく次

木曾川

多良峠より出く南へ流
と美濃へ落

千曲川

今峯山より出く流く犀川と
合水越の野尻の海へ落

釜川

公ヶ岳より東南へ落
富士川と合

碓氷川

碓氷山より東流して鳥川
と合利根川へ入

姫川

安曇郡佐井の西山より出
北流して越後の海へ入

大井川

伊奈郡甲州境より出く
東海邊にあり海へ入

○信濃國內の事物を謡曲小作する目録

○紅葉狩

○木賊

○柏寄

○望月

○寐覺

○土車

○浅間

○犀川

○柳川

○伏屋

○雪翁

○飛雲

○海野

○更科

○更科物狂

○戸隠

○思妻

○高梨

○見渡鈴

○善光

○木棧

○姨捨

○神宮寺

右共三番方り程は外小とありや及ぬぞ

以上八彼地ゆく人の
藏書とありしは

○信州名物

○小人參

○芍藥

○杏仁

○小毒

○串柿

○干蕨

○蕎麥切

○白苧

○小摺原紙

○木賊

○麻衣

○土居檜皮

○柩

○榎

○湖鱧

○同鯉

○同鮒

○江鮭

○奈良井曲物

○玄孝良

○玄孝良

以上国花万葉記所見

當国少く蕎麥切の特小佳品と賞さるる第一戸隠第二桐木第三三原

元正紀養老六年七月宜令天下国司勸課百姓種樹晚禾蕎麥及大小麥

藏置備積以備年荒云 又古今著聞集曰道命阿闍梨修行

ありさるるに山人の物とせたりけと又く是と何れやと問ひしに

あふむとてはらとまむさるんをなるといつくを安てよと傳

初とてて鳥とてはらとまむさるんをなるといつくを安てよと傳

按ふとままたとはと通るなり今も毎郡山中の人蕎麥粉一升を焼餅二つ

して腰間ふけりたり

○蓼科山

保内山にありて南十八里小なり

佐久郡やく諏方小縣の三郡に横くつり

登るる各五里水の響け哀しく過つてはをを枝折れ筆をかてし入雷れ

床ちとつ所を経く西陽雜俎時 謂瀧龍地乎背向小歩是より作けいまへ如峰あり磐石

石を階に踏くをるる三百歩姫子とつら松近よりて碓を色を露のり

日以映まると衣を緑小流く神彩壁と取小物を一磐石を瓦を敷る

如く松の席を鋪ふ似る鳥ありて其中に栖む雨をのりて雲を踏く蓼科乃

神祠と崇祀す每六月八日十五日深奇而登 三代實錄白陽成天皇元慶二年七月

十六日信濃国正六位上蓼科神授從五位下云云

蓼科山に栖む鳥は世に置きたる鶴たり画図に少しれ差あり戴冠立も尾は

長く雄の形暹羅鶏に似く高二尺斗黒色に白斑あり鳥鶏乃如く丹

頂の肉あり雌よりれ黄嶋雞に似て胸の内黒く白斑有り品穴小栖む松の

翠と啄むとつらるるの鳥を蓼科山のまへに加賀の白山にさるる飛驒

の乗鞍ヶ嶽やとつりといふ 後鳥羽院御集

あつ山の松乃本うけ小つらひくやまにするらにけきうら

夫木鈔二十山の部 正治二年百首の清歌 後鳥羽院御集 ちやアれ松乃云云 古歌小らの鳥を必松をよみわらせり鶴の字

一爾雅小又えりりむせ水無月の末に登山をり野に一夜ありて五十餘

町を登るる日の霧しらく山中人聲絶るに彼鳥六七ええまり能くえ

るに羽をまろ高く飛きんるとたるとて教輩東西にまくれはひき

そらぎ一杖をさして逐ふととり甚たけくしてまら聲かきこひ

おさえとと終ふ石中に走り入る雞ひとつを獲る雌雄石間小あり

てひ形を呼ぶその群虫の鳴が如く幽栖の鳥人驚く群と出され雞乃

大さ鳩の如く黄脚高さ五寸許色と鶉の如く目上を存る丹頂いせとこのいせ

又此山に異獸あり夏月雷雨起ふ時小歎石穗にわつり色飛く雲より

入るる冬蝮の如く須臾小雨盆を傾がぶやといふ或年暴雨乃後山

より死して流ある小歎ニッあり大さ小犬の如くやく灰色なり頭長

く紫半黒一尾も狐のごとく利爪鷲に如く按ざるに霹靂の
地樹木に爪の痕あるものは是を待て土佐國海邊夕立起らんと
して岩上に小獸あり鳥銃めて打得く雷汁と叫びの是を待て近
年六月十日暴雨に農夫二人野外を逃るる雷電一發く雷
耳をくに響れ二人は間小墮る先なる背小飛ばさ肩を踏く騰
らんときほを後なる猛者走りて彼獸を大地小投げ押へくく
矢得くり村人雷とくく多りや沙汰して見る者市北くくその
歎乃状存ふくおきくく遠り近江國かみれ村くく委くくえ
たり一人のくくりたり

越後名寄參補亦云安永中雷墮于村松城之士家而獲
獸大如猫其形亦畧相似矣其毛灰色而有光日中之後帶
黃赤色如金腹毛逆生毛末皆有岐天晴則終日垂首如
眠陰暗風雨之日則有可恐之勢矣此獸打傷足而不能

升騰是以被獲焉瘥之後士人放之矣按蓋雷墮之處往
往見此獸此獸在於三國巔河内山中飯豊山之中雲下
掩山中則乘之升騰而奔走雲中從雷霆墮地土俗名之
謂雷獸

○金峯の山陰に山丈あり人を呼て梯の如く二聲三聲連て呼ぶ
時も杣人周章て逃下ふくく又大人乱髪るあり木石に尻を
げく人を同送も又山姥の背とて長三尺許藤と玉の木の皮を
あやほる物ありと聞く按ざるに深山老獼猴の類なりく飛弾
れ山子より老大方くとぞ

○世の一嬾太郎信濃國新江の人と云 姓氏不知 安曇郡保高神社に物
臭が墓あるより 以上地名考

按本より廿丁後西三宮村又三宮あり賦沙田神社と称せ
祭神彦火々出見尊豊玉姬鶉茅葦不合尊 例祭七月廿

七日是より三里西彼田村の朝日山より物草太郎といひ一人勸
請ありし由年月不知 已上社家 浅沢氏の説 物草太郎生
所不審其裔孫と傳えて今新村に兵米なる者あり新村
の古名新口の村今上下東南北と云々 此處小太郎の塚といふ
又十丁程あり栗林村に乳の宮有り云々ハ物草太郎の
乳母と祀るといふ以上里老談又或人の藏書は物草太郎と
いふ物決あり寫して繪を加へ以てある教養也

物草太郎
東山道みちのくれ末信濃國十郡の真内まつるの郡にありの
といふ所にありての男一人傳ふる名と物草太郎といふと云々
名と物草太郎と云々ハ國に並ひやれとの言ふありては
いふ物草太郎といふと云々と家造りのありては人といふと云々
めくといふや傳ふるに面にてうに築地といふ三方に門とて
東南西北と他といふ所とつた松杉と植ゑ寫より陸地といふ
樹といふ高樹と云々といふと云々ハ突小築地といふと云々

の遠侍九間の口より下約殿を殿極壺桐壺まかたがつに
いふまで百穂の系と植ゑ守殿十二るにつくひとて尊小ふ
せ給といひて天井と云々けと云々の垂木の組入は
令と云物草太郎といふの翠簾といふ所侍所小い
まて由といふ造りて居るといふは云々といふと云々
移る多竹といふ本まことと云々といふと云々といふ
いといふの思ふと云々といふは云々といふと云々
いといふハヤセとも足らぬの輝登風臂の苔といふまでた
いといふ事なり一基をかりていふは云々といふと云々
物形一決五日の肉といふと起上りていふと云々といふ
候あり人のいといふといひまの餅といふといふといふ
といふえさといふを遊遊ままらけといふと云々といふ
一房小唄といひ傳り今一ツといふといふといふといふ
といふハ後のいといふありといふといふといふといふ
のいといふといふといふといふといふといふといふ

せんまへに抄さるるをみひて藤をぐる胸の上よりそをう
て鼻にさりと引いて口をゆるし加ふ小形を抄おむとに元と
かゝ大なるまで抄びゆる其内物さるを見りてあや
掻ふもれゆるんも物さるのつらふを人の通るるの
つらと竹の竿とさうぢりてが鳥の寄と追ひ退ゆ
三日まで待よ人見えぬ三日とすに只の人ふつら
所の地吹らるるのれ風の耐信抄といふ人小形抄ま
しられぬと看させて其勢五六十歩して通うとあか
物さるる帝足とえてかまらひ抄とてあや物中へんまは解
のひえしたびさあくとすといふとと耳あを夢の色を
打通りゆく物さるる帝足とえて世間よりせやと物さる
人のかたふりて所を抄ふとあやんらの解と馬より下りて
元つらむ行の半はいと安き半世の中は物さるる者
吾抄うとあやを多くあつけるよとあやとて乃殿やとて
斜やらずつあやれ後とてにるれ風の耐信抄といふ人か

腹とをさいてやふもゆるうゆるべきは馬と抄て是とききあつ
めう半うやあや物さるる帝とよ者うさんいあつら大いふ
是がうりあはねおのきいいうやういさうぞさんい人の物と
らさはこれは何とすたが呉いふね時ハや又日と十日をかり
とむやくもはれいと中色を扱ハ不便の次第うね命た
もかりあつくとせよ一樹の陰はやるとと一河のなれと
汲くと他生の縁とあつ所丁せ多きたとが雨風の雨は
生さつらるる前世の宿縁かり地と依つてまはよと有り
り色バりあひんんと中もさるるせんといつ物さるる外経
小地もかゝりせと中せを商ひてとよとあは基は
ひんせと中せとせんといつれを今更慣るねりあつ物
事かりがてくいと中せをうらるる抄うねいとさるる助る
あつにせんとて取と取とれとつらて更慣肉とまはま
け物さるる帝に毎日三合版と二合くつ抄とのまはま
かたうらんりのハワダ版はかあつととと縮と進らるる

さるにふりてゆと申は是を人々是と云て笑ひけりけり
色の黒くまゝにけりたるものも是は有るにせしむ
ける大納言殿はきこしめしけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり
信濃玉は増りけり東山西山御所内裏堂宮社
いろくきよとさかばはけりけりけりけり
おとく三月のちよと七月まで免一つく
月のひよを成ぬきといふとぬをりて國下り
かどの宿小治り吾分と熱してあややけ
あはよれ女房とけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり
あひ宿の亭主とちよけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけり
ききたる宿の男はとていけりけりけり
をりけりけりけりけりけりけりけり

尋ん事ハヤとけりけりけりけり
ぞ色好く存子とけりけり色好く
けりけりけりけりけりけりけり
好くけりけりけりけりけりけり
二三又けりけりけりけりけり
是とてけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけり
やけりけりけりけりけりけり
吾目ふりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけり
に清水へ参りてけりけりけり
ありけりけりけりけりけり
何れ色とてけりけりけりけり
さるとえりけりけりけりけり
吹ていけりけりけりけり



雲のくりに
 攀躋して
 けり態は
 物さか
 名乃
 中川
 あらきる
 呼・庵



物真太郎
 信濃中將
 本國に帰
 富貴自然の理
 天命一定乃亂由
 小因か
 涼山
 といふも
 ちん本
 を嘆く
 小
 何
 利忠

烏帽子の着ぎに賢つれずといひたる云卿殿上人少と稱して
わらやどに豊前のかの殿はけし一聞一見糸のおもひ
引つゝあつて糸もきつゝ豊前あつて足とて男びぢんはてあつ
る苗名ハ雅と向ひ強て物さる帝と答へる村の外で山名
わかるとして初て雅樂の左衛門及びなりなるやにとうくもつた
け支内裏へきこへていそがしきとの宣旨あり辞退せ
ととくぬえすめりか車に乗て院系する大極殿小召一御
連袂の上より侍りて御二そはつたまのまこと宣旨あり折
柄迄小尊の花ちりてさえつるときかくかん

鶯のねむる色のまこゆるハ梅のむぎとてやんはさえ
帝こととえいらん背しゆがさこゆとてえといふと宣旨あり
みれさうけしあつりとあむ

信濃まははらとてあつとてあつたのこへいりあつと
帝是ときとて一先づ御感に入して御先祖とやせと宣旨あり
先祖とがれ者少といふとあつとてあつた國目代へあつとて

其所の地頭一宣旨とて一御尋りつゝは薄小巻とて文書と
えよせて見糸に入して是とて一御後使とて人皇五十
三代の帝仁明天皇の弟二の皇子深草の天皇の御子二位
の中將と中人信濃一流とて年月と送る信一二人の
御子とて一是とわたりとてあつとて善光寺の如來に奉りて
一人の御子とて一受給ひて甲斐とてあつとてあつとて
とてあつとて其後凡夫のちりにあつとてあつとてあつとて成
多とて帝殿後使とて王地と放れて御ちり人あつ
おつとてあつとて信濃の中將小あつとて甲斐信濃の兩國
と賜りては女房お具して信濃へ下り朝日の卿小着とてあ
新のつの地は信濃門尉とて忠とてあつとて甲斐信濃兩國
國乃惣政所不定とてあつとて三年養育する百姓小とてあつ
あつとてあつとて我身はつとてあつとてあつとてあつとてあつ
貴賤上下にかつとて國の政扱とてあつとてあつとてあつとてあつ
加護つて百二十年の春秋と送る御子とてあつとてあつとて七珠

万葉にわれらち壽の神とあり後小原ハお多かたの大明神室
俵井の権現とありてさるるは文徳天皇の御時ニ然た
あぐせん結の神とありはれ男女とまての事とせん人の自
前小糸とてるる人と誓ひてかへりてまてやうかよせ九ま
本地とやせと腹とてて神ハ本地とありてまて三神の苦
こととありて直小原ひしとありて人の心をくくのまて
くくともありてまてのわう毎日一度この双紙とてみて人
おせん人の賤事おられとて幸心ふまるとてとの西誓やう
目出度度中くやとありて南に 右物語書画共備園自筆

善光寺道名所圖會卷之五大尾

善光寺名所圖會通志(一)

豊田利忠のゆゑ此書撰著ハとて一以て善光寺人々
かゝに詳され候今さういふ事とて候はれ候思ひ候
されハいまより十のやうに候とて候はれ候思ひ候
夫より一應は了れり由は候とて候はれ候思ひ候
受物とて候はれ候今ハ光のか次とて候はれ候思ひ候
たぬれとて候はれ候今ハ光のか次とて候はれ候思ひ候
たぬれとて候はれ候今ハ光のか次とて候はれ候思ひ候
用ひ下候乃候とて候はれ候今ハ光のか次とて候はれ候思ひ候
公よせとて候はれ候今ハ光のか次とて候はれ候思ひ候

まゝ見ぬ物あれは傍者様くく久天以あききれ抄以て年
かこもも物勢らねく下様く母出く夫くくくはま
とく勢とせ果ら果て成もく能以あきやしくむま本ま
たし終るくはあくくおわり近き頃岡田啓野口道直等とおも
くりてわの尾張ふのをゆりくくくあきくくあきくく
見くせわんぬくは傍思ひく子わやまけく子母多くく
おきく抑善光古くく浄寺き世人許者浄天ま
巨泉法師あれはあきくくわりてまきおきと何れはく
くく子とえ物勢ぬと今け書紙くくく浄寺き文
ぬり取くくく名はあきくく所く母あきくく本わきく

くり終るあきく其由きくくは終るくくくは終
大本房小本房れ計はく記山海と極楽の道くく母ぬ久
指く許お勢らね天のや何里か南久きくくく
さき世の中ふすくくく人あきくくくくくくく
病ひくくくくくくくかかの望紙果くく人のけ書
えくくくくくくくおき浄を具きくくくくくく
わまむくくくくくくくくくくくくくくくく
くく年このえくくく鼻月尾張の殿人の田切忠近

後序

向庸園甫。游歷木襲。探索勝槩。撰圖誌五卷。號曰善光寺衛名所圖會。近日予視新脫其橐圖。最可愛玩者。殆不少。飄々焉如凌千重靈山。入百疊煙霞。仰則窺霸佛隱顯之妙境。俯則覽名將勝敗之戰場。且俾嗽石枕流之士。無勞躋勝之具。不藉蓑笠之什。无費芒屨之錢。不備藍輿之夫。徑得卧遊于山水中。是非作者自苦之功。何也。又如此篇首列張和漢絲筆之麗藻。中包羅丘壑真形之奇觀。是亦堪稱三不朽。况禽之剖。劇氏乎。予謾作狂歌。聊表其意。便塗之云。

吾史古道の善とく善外やよのほひたるぬ此名所つ志

庸園氏。豐田。姓。藤原。名。利忠。通稱。伴右衛門。又稱。養甫。能通畫理。嘗入土佐家之藩籬。偶書肆靜觀堂主人。携此本來乞。予重閱。暨備書。予不敢辭。乃應攸其需。以秃筆淨書。遂附與之。噫。諸君子。既有齷齪叙跋之杰作。其言美而盡矣。予復何言。雖然。於庸園氏也。為一知己。豈可無片言邪。故題此葛藤之數言。以蛇足于卷端。願予今幸得為此編。殿不敢後也。弘七戊申二月書於艸々菴中。

南姑射

南陔富永贛時年七十有五



編輯畫圖

庸園利忠



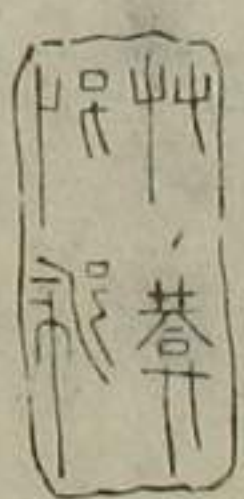
校正補畫

春江忠近



參閱備書

南陵居士



彫工

一五之卷 名古屋 中村屋治助
二三之卷 京師 井上治兵衛
四之卷 名古屋 真寄普房

嘉永二年

名古屋書林

美濃屋伊六

巳酉季秋

發行

書林

江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛

同 芝神明前 岡田屋嘉七

大坂心齋橋筋北久太郎町 河内屋喜兵衛

同 博勞町 河内屋茂兵衛

勢州津宿屋町 篠田伊十郎

信州松本本町 高美屋甚左門

名古屋本町通十丁目 美濃屋文次郎

同 本町通六丁目 美濃屋伊六

合梓

